

とう　ぜん　じ　　くろ　やま　い　せき
東　禪　寺・黒　山　遺　跡 VI

2011

財団法人 山口県ひとつくり財団

山口県埋蔵文化財センター

序

本書は、南若川流域治水対策河川工事に伴い、山口県防府土木建築事務所から委託を受け、山口県ひとづくり財団が実施した山口市鈎鉢司に所在する東押寺・黒山遺跡発掘調査の記録をまとめたものです。

調査の結果、周防鈎鉢司に関連すると考えられる古代の集落跡等を確認することができ、当地域の歴史を知るうえで貴重な成果をおさめることができました。

本書が文化財保護に対する理解を深め、教育ならびに学術研究や郷土史理解の資料として広く活用されることを期待するものであります。

最後になりましたが、当発掘調査の実施・報告書の作成にあたり、ご指導・ご協力いただいた関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成23年3月

財団法人 山口県ひとづくり財団
理事長 藤井俊彦

例　言

1 本書は平成22年度に実施した、東禪寺・黒山遺跡（山口県山口市大字鉢銭司地内）の発掘調査報告書である。

2 調査は財団法人山口県ひとづくり財団が山口県防府土木建築事務所の委託を受けて実施した。

（契約名：南若川流域治水対策河川工事に伴う調査業務委託第1工区）

3 調査組織は次のとおりである。

調査主体 財団法人山口県ひとづくり財団 山口県埋蔵文化財センター

調査担当 主任調査研究員 小南 裕一

文化財専門員 石川 彰

文化財専門員 米澤 昭信

調査員 山田 圭子

4 調査にあたっては、山口県教育委員会、山口市教育委員会、山口県防府土木建築事務所ならびに地元関係各位から協力・援助を得た。

5 本書の図1は国土地理院発行の2万5千分の1地形図「小郡」「台道」を複製使用した。図2は山口県防府土木建築事務所提供的地図を元に作成した。

6 本書で使用した方位は、国土座標（世界測地系）の北で示し、掘立柱建物跡以外の個別遺構に関しては磁北で示している。また、標高は海拔高度（m）である。

7 本書で使用した土色の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』Munsell方式による。

8 図版中の遺構・遺物番号は、実測図の遺構・遺物番号と対応する。

9 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

S B : 掘立柱建物 S K : 土坑 S P : 柱穴

S D : 溝状遺構 S X : 性格不明遺構

10 古代銭の成分分析については、財団法人元興寺文化財研究所に依頼し、その成果を付編として掲載した。

11 本書の作成・執筆は、小南・石川・米澤・山田が共同で行い、編集は小南が行った。

本文目次

I	遺跡の位置と環境	1
II	調査の経緯と概要	3
III	調査の成果	5
1	基本層序	5
2	遺構	5
3	遺物	23
IV	まとめと考察	43
	付編 東禅寺・黒山遺跡出土金属製品の分析	45

挿図目次

図1	遺跡の位置と周辺の遺跡	1
図2	調査区設定図	3
図3	基本土層図	5
図4	X地区検出遺構	6
図5	XI地区遺構配置図	9
図6	XI地区検出遺構（1）	11
図7	XI地区検出遺構（2）	12
図8	XI地区検出遺構（3）	13
図9	XI地区検出遺構（4）	14
図10	XI地区検出遺構（5）	15
図11	XI地区検出遺構（6）	16
図12	XI地区検出遺構（7）	17
図13	XII地区検出遺構	18
図14	XIII地区遺構配置図	20
図15	XIII地区検出遺構（1）	21
図16	XIII地区検出遺構（2）	22
図17	X地区出土遺物（1）	23
図18	X地区出土遺物（2）	24
図19	XI地区出土遺物（1）	25
図20	XI地区出土遺物（2）	26
図21	XI地区出土遺物（3）	27
図22	XI地区出土遺物（4）	28
図23	XI地区出土遺物（5）	29
図24	XI地区出土遺物（6）	30
図25	XII地区出土遺物（1）	31
図26	XII地区出土遺物（2）	32
図27	XIII地区出土遺物（1）	33
図28	XIII地区出土遺物（2）	34
図29	各地区出土金属製品・石製品	35
図30	富田式暗渠工事方法	44

表目次

表1	掘立柱建物跡一覧表	19
表2	出土土器・土製品観察表	36
表3	出土石製品観察表	42

图版目次

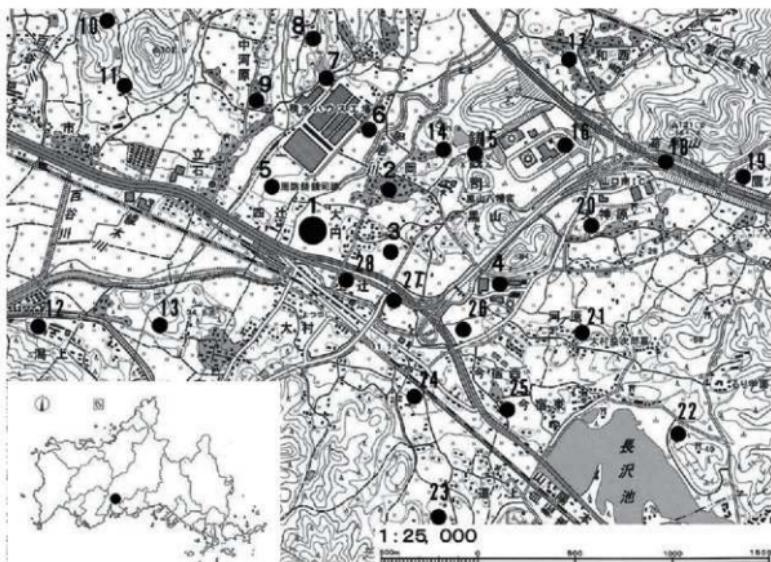
图版 1	調查区遠景	图版12	S P475遺物出土狀況
图版 2	調查区全景		S P484遺物出土狀況
图版 3	IX 地区全景		S D 7 · S D 8 · S D 9 完掘狀況
	X 地区全景		S D 7 底面
图版 4	XI 地区全景		S D 7 排水口出土狀況
图版 5	XII 地区全景	图版13	S D 8 · S D 9 完掘狀況
	XIII 地区全景		S D 10 · S D 11 檢出狀況
图版 6	IX 地区東壁土層斷面		XII 地区包含層石斧出土狀況
	X 地区南壁土層斷面		S D 10 · S D 11 杭列出土狀況
图版 7	S B 1 · S B 2 完掘狀況		S P585遺物出土狀況
	S P 6 上層遺物出土狀況		S P606遺物出土狀況
	S P 6 下層遺物出土狀況	图版14	S P621遺物出土狀況
	S P 6 完掘狀況		S P665遺物出土狀況
	S D 1 土層斷面		S P680遺物出土狀況
	S D 1 完掘狀況		S P698遺物出土狀況
	X 地区暗渠 1 土層斷面		S K34遺物出土狀況
图版 8	XI 地区東半部掘立柱建物群		S K34完掘狀況
	XII 地区西半部掘立柱建物群		XIII 地区暗渠檢出狀況
图版 9	S P 30 遺物出土狀況	图版15	S K33遺物出土狀況
	S P 258 遺物出土狀況		S K33遺物出土狀況
	S P 301 遺物出土狀況	图版16	出土遺物①
	S P 361 遺物出土狀況	图版17	出土遺物②
	S P 352 遺物出土狀況	图版18	出土遺物③
	S P 352 狀狀耳飾出土狀況	图版19	出土遺物④
	S P 702 遺物出土狀況	图版20	出土遺物⑤
	S P 756 遺物出土狀況	图版21	出土遺物⑥
图版10	S K 1 遺物出土狀況	图版22	出土遺物⑦
	S K 1 完掘狀況	图版23	出土遺物⑧
	S K14 土層斷面	图版24	出土遺物⑨
	S K14 遺物出土狀況	图版25	出土遺物⑩
	S K15 土層斷面	图版26	出土遺物⑪
	S K15 完掘狀況	图版27	出土遺物⑫
	S K16 遺物出土狀況	图版28	出土遺物⑬
	S K21 遺物出土狀況		
图版11	S D 2 檢出狀況		
	S D 2 遺物出土狀況		
	XII 地区包含層遺物出土狀況		
	S P 429 遺物出土狀況		
	S P 462 遺物出土狀況		

I 遺跡の位置と環境

東禪寺・黒山遺跡は、山口市の鎌銭司地区に位置する遺跡である。鎌銭司地区は山口湾に流入する横野川河口一帯に発達した吉南平野の北東部にあり、西は横野川を隔てて山口市小郡地区に、北は黒河内山を中心とした山口山地を境として山口市平川地区に、東は南若川上流の谷中分水帶を通じて防府市大道地区に、南は火ノ山・陶ヶ岳のある秋穂山地を隔てて山口市秋穂二島地区に接している。本遺跡は、山口山地から南流する金毛川の左岸に位置し、標高7~8mの洪積段丘の中位段丘下位面に広がっており、平安前期の海進期には、汀線が6~7mの位置にあったと考えられていることから、遺跡の南側にはほぼ当時の海岸線は接していたと思われる。現在、遺跡周辺は水田地帯となっており、南西部の近世干拓地へとつながっている。

本遺跡周辺の生活の痕跡を見てみると、もっとも古いものとして、縄文時代の遺物が出土する鎌銭司地区東部の長沢池周辺にある長沢池遺跡がある。長沢池は慶安4(1651)年に作られた県内第2のため池であるが、その周辺や湖底から縄文土器をはじめ石錐・石匙・石錘など、多数の遺物や遺構が発見されており、狩猟とともに漁労も行われていたことが推察される。ところが、弥生時代から古墳時代の遺物や遺構の発見は著しく少ない。

奈良時代になると、本遺跡のある鎌銭司地区に西隣する陶地区に、須恵器を生産する大窯業地帯が



1. 東禪寺・黒山遺跡
2. 東禪寺・黒山遺跡(岡上ノ原・後子庵地区)
3. 東禪寺・黒山遺跡(東大門・上徳田地区)
4. 東禪寺・黒山遺跡(河原地区)
5. 周防鎌銭司跡
6. 上北田遺跡
7. 八ヶ坪遺跡
8. 糸根遺跡
9. 下糸根遺跡
10. 友輪窯跡
11. 鎌鉄坊跡
12. 潟上遺跡
13. 稲富窯跡
14. 舟木遺跡
15. 伊表山遺跡
16. 桐ヶ沼・尾山山遺跡
17. 和田遺跡
18. 並(巻)窯遺跡
19. 弥市原遺跡
20. 天神原遺跡
21. 河原遺跡
22. 長沢池遺跡
23. 道ノ上遺跡
24. 蔡河内遺跡
25. 今宿東遺跡
26. 今宿西遺跡
27. 鎌銭司大歳遺跡
28. 上庄遺跡

図1 遺跡の位置と周辺の遺跡

発達する。陶窯跡は奈良時代から平安時代にかけての須恵器の窯跡であり、小郡地区につながる丘陵地に50基以上の窯が存在したと考えられ、「陶窯跡」は国指定史跡となっている。これは、丘陵の傾斜地が登り窯の構築に適していたこと、洪積段丘の丘陵地が、陶土として最適な良質の粘土から形成されていたためであると考えられる。また古代の当地域は、八千駅がおかれ古代山陽道に面し、前述のように汀線が山口湾の奥まで広がっていたこともあり、海陸交通とともに発達していたこともこの地に窯業が発達した要因であるといえる。こうした立地条件もあって、9世紀には周防鋳銭司が成立する。周防鋳銭司では、皇朝十二銭のうち「富壽神寶」から「乾元大寶」までの8種類を铸造しており、昭和48（1973）年に「周防鋳銭司跡」として国指定史跡となった。

周防鋳銭司の北側の八ヶ坪遺跡、下糸根遺跡、本遺跡の南東にある上辻遺跡、鋳銭司大歳遺跡、今宿西遺跡、また本遺跡の平成7～11・14・20年度調査でも、古代から中世にかけての掘立柱建物跡や土坑などの遺構や縄文陶器、埴堀、輪羽口、銅滓などの遺物が出土しており、周防鋳銭司関連の遺跡と考えられている。このことから、奈良時代から平安時代にかけて、周防鋳銭司跡や陶窯跡などの生産遺跡の発展とともに、それらの施設で働く職人集団の集落や関連遺跡が当地域一帯に展開していたものと推察される。

中世以降になると、多くのため池の築造とともに灌漑による水田化が進行し、古代の臨海工業地域的な様相から、農村的な様相へ変化する。また、南に位置する秋穂浦が、山口に本拠を構える大内氏の外港であったため、山陽道と秋穂街道が四辻で交差し、大変に賑わったとされている。従来低地にあった集落は、平安時代後期から室町時代にかけて微高地へ移動した。さらに、中世の海退期や近世萩藩による干拓事業により低地の水田化が進み、享保13（1728）年に作成された『地下上申絵図』にも描かれているように、現在のような水田地帯となった。

ところで、東禅寺・黒山遺跡の名称は、本遺跡のある鋳銭司地区の小字名に由来する。大内氏時代、実際にこの地に「東禅寺」という寺院があったと伝えられているが、現在その遺構は未確認である。また、黒山地区には铸造に関わる黒山神を祀る「黒山八幡宮」が現存している。このことからもこの地域が古来より、深く铸造に関わってきた地域であったことをうかがわせる。

参考文献

- 山口県教育委員会文化課編『弥市原・東禅寺』建設省山口工事事務所・山口県教育委員会 1982年
山口県教育委員会文化課・山口県埋蔵文化財センター編『上辻・鋳銭司大歳・今宿西』
山口県教育委員会・建設省山口工事事務所 1984年
山口県教育財団『東禅寺・黒山遺跡Ⅰ・Ⅱ』 1996・1997年
山口県埋蔵文化財センター『東禅寺・黒山遺跡Ⅲ～V』 1998～2000年
山口県埋蔵文化財センター『東禅寺・黒山遺跡（東大円・上徳田地区）』 2003年
山口県埋蔵文化財センター『東禅寺・黒山遺跡（岡上ノ原・後子庵地区）』 2009年
山口市教育委員会『周防鋳銭司跡』 1978年
山口市教育委員会『八ヶ坪遺跡』 1992年
山口市教育委員会『東禅寺・黒山遺跡』 2000年
山口市教育委員会『下糸根遺跡』 2000年
山口市史編集委員会編『山口市史』山口市 1982年
下中邦彦 日本書紀地名大系『山口県の地名』平凡社 1980年
竹内理三 角川日本地名大事典『山口県』角川書店 1988年

II 調査の経緯と概要

東禅寺・黒山遺跡が位置する山口市銚銭司地区は、地形的な要因により、たびたび水害に見舞われてきた。そこで県は、この地域に調整池を建設する工事を計画し、これに伴い、平成7年度より当該地区的埋蔵文化財発掘調査が実施されている。この発掘調査は山口県埋蔵文化財センターによって平成11年度まで継続して実施されてきたが、その後、諸般の事情により工事計画の実施が延びたため、調査も一時中断していた。

こうした状況下、平成21年度に山口県山口土木建築事務所（当時）より南若川流域治水対策河川工事に先立つ埋蔵文化財発掘調査（東禅寺・黒山遺跡）の実施依頼が山口県教育委員会社会教育・文化財課を通じて財団法人山口県ひとづくり財団・山口県埋蔵文化財センターにあり、協議の結果、平成22年度の事業として実施されるはこびとなった。

発掘調査の委託契約は平成22年4月6日をもって、山口県防府土木建築事務所（平成22年度より山口土木建築事務所と統合）と財団法人山口県ひとづくり財団・山口県埋蔵文化財センターとの間で締結され、以後、発掘調査のための事前準備が進められることとなった。関係機関との打ち合わせ、地元自治会へのあいさつ等を行い、5月下旬には調査事務所の設置や、調査区の草刈り等を実施し、現地調査開始の準備を整えた。

本年度の発掘調査対象面積は3640m²であり、調査区を5つに分けIX～XII地区とそれぞれ命名し（図2）、調査を開始した。遺構面確認のためのトレンチ掘削と重機による表土除去作業を6月1日より開始し、その後人力による本格的な遺構検出作業に入った。基本的な層序は、客土や水田耕作土の下

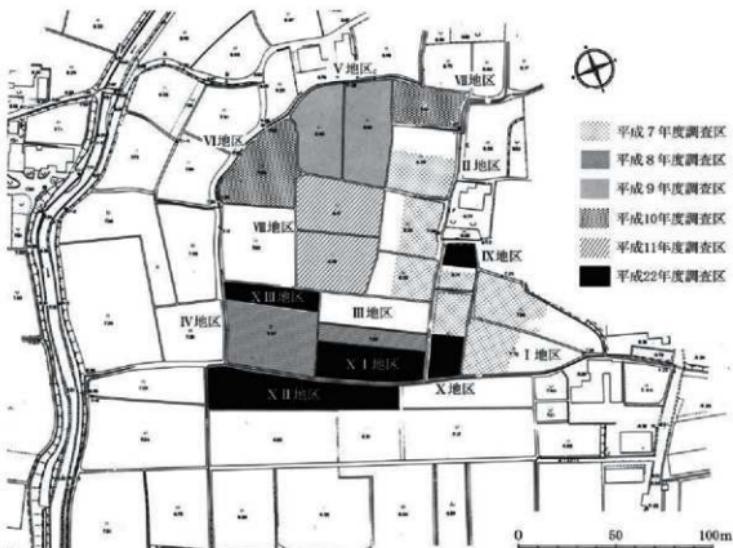


図2 調査区設定図

に灰色系の遺物包含層があり、その下が遺構面であるが、遺物包含層が存在しない地区もあり、地表面から遺構面までの深さは一様ではない。遺構の密度はXII地区とXIII地区が高く、特にXII地区は面積も広いため、まずこの地区から優先的に作業を進めていくことにした。しかし、本格的な作業開始が梅雨時であったことや、調査区自体の水はけの悪さなどにより、作業は難航した。なお、IX地区に関しては、遺構がほとんど存在しないことや、常時帶水状態にある危険性を考慮し、図面作成と写真撮影が終了した7月9日に埋め戻しを行った。



表土除去



調査風景



現地説明会

その後、個別遺構の掘り込みや、包含層掘削作業に移り、図面作成や写真撮影を随時行い、調査を進めていったが、その過程で8月5日には山口市渕上中学校生徒、8月19日には山口市内小学校児童（山口市文化財教室）、9月16日には山口市平川中学校生徒を受け入れ、体験発掘などを行った。暑い中ではあったが、児童・生徒らは真面目に作業に取り組み、先人が遺した文化の大切さを認識することができたようである。

9月に入ると天候も安定し、調査は順調に進み、古代～中世の掘立柱建物跡や土坑などが次々に確認され、掘り込みが進められていった。遺物についてもXII地区的柱穴から縄文時代の玦状耳飾が出土し、XIII地区では土坑から良好な土器群と延喜通寶の共伴関係を確認するなど、大きな成果を得ることができた。そして10月22日には空中写真撮影および測量作業を実施し、10月30日には調査成果を公表するために現地説明会を開催した。この現地説明会には地元住民を中心として約60名の参加があり、盛会のうちに終了することができた。

その後、最終確認のためのトレンチ掘削や、図面の補足作業等を行い、11月5日には調査事務所の撤去等を行い、5ヶ月に及ぶ現地調査を無事終了することができた。現地撤収後は山口県埋蔵文化財センターにおいて、図面記録の整理や出土遺物の図化等を行い、この報告書を作成した。

III 調査の成果

1 基本層序

今回は調査区をIX～XII区の5地区に分け、発掘を実施したが、各調査区で、客土や水田耕作土の厚さが異なるため、遺構面までの深さは一定ではない。図3に示したのは、IX地区（左）とX地区（右）の土層図であるが、IX地区については遺構面として捉えられる4層上面で遺構がほとんど検出できなかつたため、全体的に深掘りを行つたが、遺構、遺物ともに確認できなかつた。X地区については、1層が客土、2・3層が水田耕作土、4層が遺物包含層、5層以下が遺構面であり、西に隣接するXI地区もほぼ同じ層序を示している。4層には主に中世後半期の遺物が多く含まれており、調査区南端のXII地区でもその存在が認められる。いっぽう、XII地区ではこうした遺物包含層は存在せず、水田耕作土の直下が遺構面となつてゐる。

2 遺構

今回の発掘調査区中、遺構の密集度が高いのはXI地区とXII地区であり、特にXI地区は面積も広いため、多くの遺構を確認することができた。いっぽう、IX地区では遺構がほとんど存在しなかつたが、これは過去の隣接地区における調査成果からみても十分に予測できることであった。すなわち、IX地区および隣接する西側と南側は遺構密度が薄いエリアであり、集落内における空閑地として捉えることが可能である。また、全体調査区の南端にあたるXII地区も遺構密度が薄いが、これは地形的にこの地区が他地区よりも標高が低くなっていることが主たる原因である。

今回の調査では、掘立柱建物33棟、土坑34基のほか、溝状遺構や性格不明遺構などを検出することができた。以下、地区ごとに遺構の説明を行いたい。

（1）X地区検出の遺構

掘立柱建物

S B 1（図4 図版7） X地区的東側に位置する建物跡で、桁行2間（4.8m）×梁行2間（4.4m）、床面積21.12m²を測る。棟方向はN63°W。5つの柱穴で柱痕が認められ、SP3からは土師器の塊（1）が、SP10からは土師器の壊（2）が出土した。中世の掘立柱建物と考えられる。

S B 2（図4 図版7） X地区的東側に位置する建物跡で、桁行2間（4.6m）×梁行1間（1.3m）、床面積5.98m²を測る。棟方向はN72°W。建物の時期については不明である。

柱穴

S P 6（図4 図版7）

中央やや西側で検出された。古代末期の土器群が一括の状態で出土しており、建物廃絶後の地鎮行為によるものと考えられる。

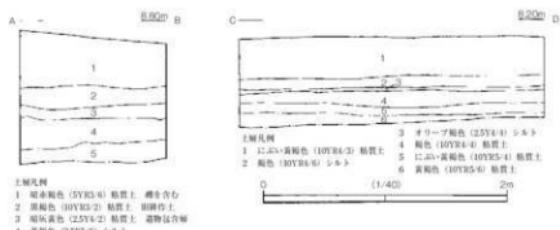


図3 基本土層図

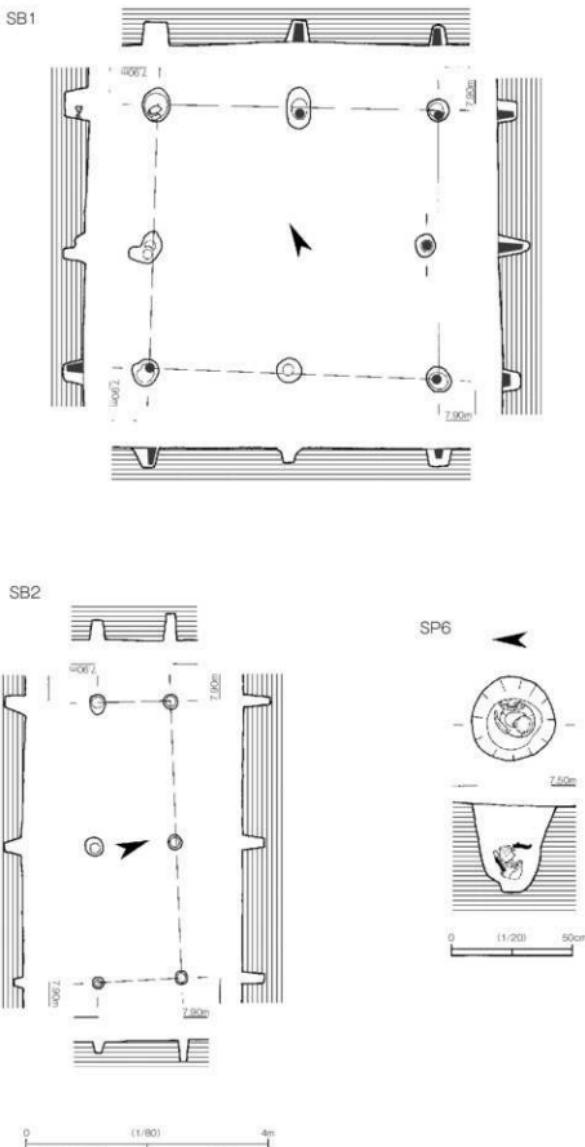


図4 X地区検出遺構

(2) XI地区検出の遺構

S B 5 (図6 図版8) XI地区中央部の北側に位置する建物跡で、桁行2間(3.6m)×梁行1間(2.1m)、床面積7.56m²を測り、規模としては小型の部類に属する。棟方向はN64°Wで、重複するSB9とほぼ同じである。建物東南隅に位置するSP27では柱痕が認められ、土師器の壺と塊(32・33)が出土した。中世の建物である可能性が高い。

S B 6 (図6) XI地区中央部の北側に位置する建物跡で、桁行3間(7.2m)×梁行1間(2.7m)、床面積19.44m²を測る。棟方向はN73°W。建物北面に所在するSP290では柱痕が認められた。時期については出土遺物が小片であるため、判断することが難しい。

S B 7 (図6 図版8) XI地区の東端に位置する建物跡で、桁行3間(7.5m)×梁行1間(3.0m)、床面積22.50m²を測る。棟方向はN22°E。SB20と重複する。構成柱穴には柱抜き取りの痕跡を留めるものが多く認められる。SP730からは瓦質の足鍋(35)が、SP144からは土師器の皿(36・37)と土師質の器台(38)が出土した。中世後半期の建物である。

S B 8 (図7 図版8) XI地区東半部の南側に位置する建物跡で、桁行2間(4.7m)×梁行2間(3.9m)、床面積18.33m²を測る。棟方向はN21°E。詳細な時期は不明である。

S B 9 (図7 図版8) XI地区東半部の北側に位置する建物跡で、桁行3間(6.9m)×梁行2間(4.6m)、床面積31.74m²を測る。SB5・SB13と重複する。棟方向はN67°Wで、SB5や隣接するSB4とほぼ同じである。SP52から土師器の壺(39)が出土した。時期を限定することは難しいが、中世の建物である可能性が高い。

S B 12 (図8) XI地区中央部に位置する建物跡で、桁行2間(4.0m)×梁行2間(3.6m)、床面積14.40m²を測る。棟方向はN73°W。平面形態がほぼ正方形を呈する掘立柱建物跡であり、詳細な時期については不明。

S B 13 (図8 図版8) XI地区東半部の北側に位置する建物跡で、桁行4間(5.4m)×梁行2間(3.8m)、床面積20.52m²を測り、棟方向はN71°W。南面に庇(1.6m)をもつ。ただし、調査区外に建物の一部が広がる可能性があるため、規模や構造等については確定なものではない。建物北面に位置する柱穴は、残存する径、深さともに規模が大きいが、これは柱が抜き取られていることに起因する。SB4・SB9と重複しており、SB9とは切り合い関係にある。土師器の壺(64)が出土したSP167は、この建物を構成する柱穴の1つとなる可能性があり、この他の構成柱穴から出土した土器片と併せて判断すると、この建物の時期は古代末期ごろである可能性が高い。

S B 14 (図9 図版8) XI地区中央部の南側に位置する建物跡で、桁行5間(11.7m)×梁行2間(5.2m)、床面積60.84m²を測り、今回検出された建物跡の中では最大規模である。棟方向はN59°W。SP361・SP702から須恵器の壺(42・43)が出土しており、また土師器・須恵器・土師質土器(93~96・100)が出土したSK22とSK28は、この建物を構成する柱穴となる可能性がある。これらの遺物から判断して、この建物の所属時期は古代末期である可能性が極めて高い。また、建物の北西面中央で検出されたSP352からは块状耳飾(222)が出土しているが、これは混入品であると考えられる。

S B 16 (図10 図版8) XI地区西半部の北側に位置する建物跡で、桁行3間(5.7m)×梁行2間(3.6m)、床面積20.52m²を測る。棟方向はN21°Eで、隣接するSB15とほぼ同じである。SB17と重複し、

一部の柱穴が切り合い関係にあるが、先後関係については判断できなかった。SP332からは土師器の壺（46）が、SP388からは白磁の碗（47）が出土しており、中世前半期の建物であると考えられる。東接するSB15も規模や棟方向、出土遺物などから、時期的に近いものと判断できる。

SB17（図10 図版8） XI地区西半部の北側に位置する総柱の建物跡で、桁行2間（5.4m）×梁行2間（5.1m）、床面積27.54m²を測る。棟方向はN69°Wで、重複するSB16、隣接するSB15にはほぼ直交する。柱穴からは、土師器の小片などが出土しているが、これらによって建物の時期を判断することは難しい。

SB19（図11 図版8） XI地区の西端に位置する総柱の建物跡で、現状では桁行3間（8.0m）×梁行2間（4.3m）、床面積34.40m²を測るが、北西側の柱穴が調査区外に所在するため、正確な規模は不明である。いずれにしろ、かなり規模の大きな建物跡であると考えられる。棟方向はN12°E。構成柱穴であるSP323からは土師器の壺（48）が、SP349からは土師器の甕（49）が出土しており、こうした遺物から、古代末期の建物であると考えられる。

土坑

SK1（図12 図版10） XI地区西半部、SB14の西側に位置する。平面形は直径約42cmの円形土坑を主体として、東側に柱穴状の張り出しがもつような形を呈する。深さは24cm。断面形は袋状を呈し、底部は最大で61cmの幅をもつ。埋土は3層に分かれ、上層のにぶい黄褐色粘質土、オリーブ褐色粘質土から、古墳時代の土師器甕（101）が押し潰されたような状態で出土した。出土状況から考えて、この土師器は、ほぼ完形の状態で埋葬されていたものと考えられる。

SK14（図12 図版10） XI地区西半部の北側に位置する。平面形は長軸73cm、短軸62cmの不整椭円形を呈するが、南側を柱穴によって切られている。深さは12cm。埋土は単層で、暗赤褐色粘質土層から土師器の皿（88・89）と焼土塊が出土した。中世の遺構であると考えられる。

SK15（図12 図版10） XI地区西半部の北側、SK14の西隣に位置する。平面形は長軸111cm、短軸82cmの不整長円形を呈する。深さは25cm。埋土は上層が炭や赤色焼土粒を含む灰色粘質土で、下層が炭を多量に含むオリーブ黒色粘質土である。土師器の壺（90）をはじめ多くの土器片が出土したが、小片のため図化していない。

SK16（図12 図版10） XI地区西半部の北側、SK14・SK15の西側に位置する。平面形は長軸84cm、短軸60cmの不整椭円形を呈する。深さは13cm。埋土は単層で、赤色土器粒、マンガン粒、木炭を含む赤灰色粘質土である。埋土上層から土師器の壺（91）が出土しており、この遺物から中世前半期の遺構であると判断できる。

SK21（図12 図版10） XI地区の西端に位置する。平面形は直径約105cmの不整円形を呈する。深さは10cm。床面にピットが複数認められるが、本土坑に関係するものであるかどうかは不明である。埋土は単層で、3～5mm大の炭粒やマンガンを含む褐灰色粘質土から、土師器の壺（92）が伏せられた状態で出土した。この遺物から、本土坑の年代は古代後期に比定することができる。

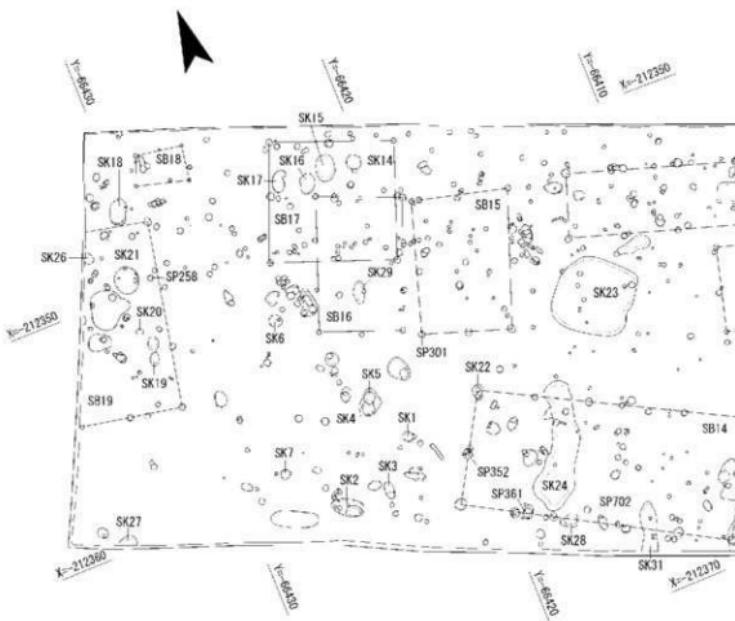
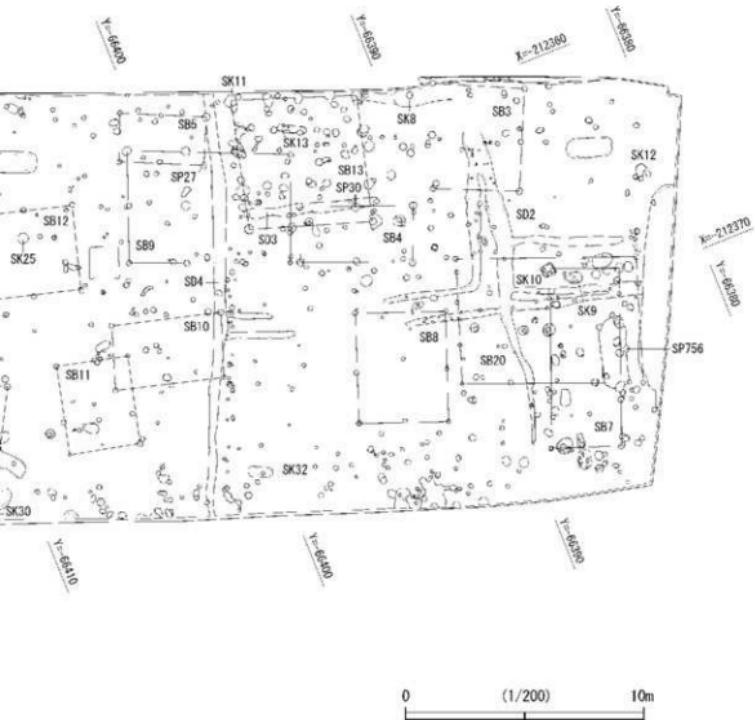


図5 X地区



区遺構配置図

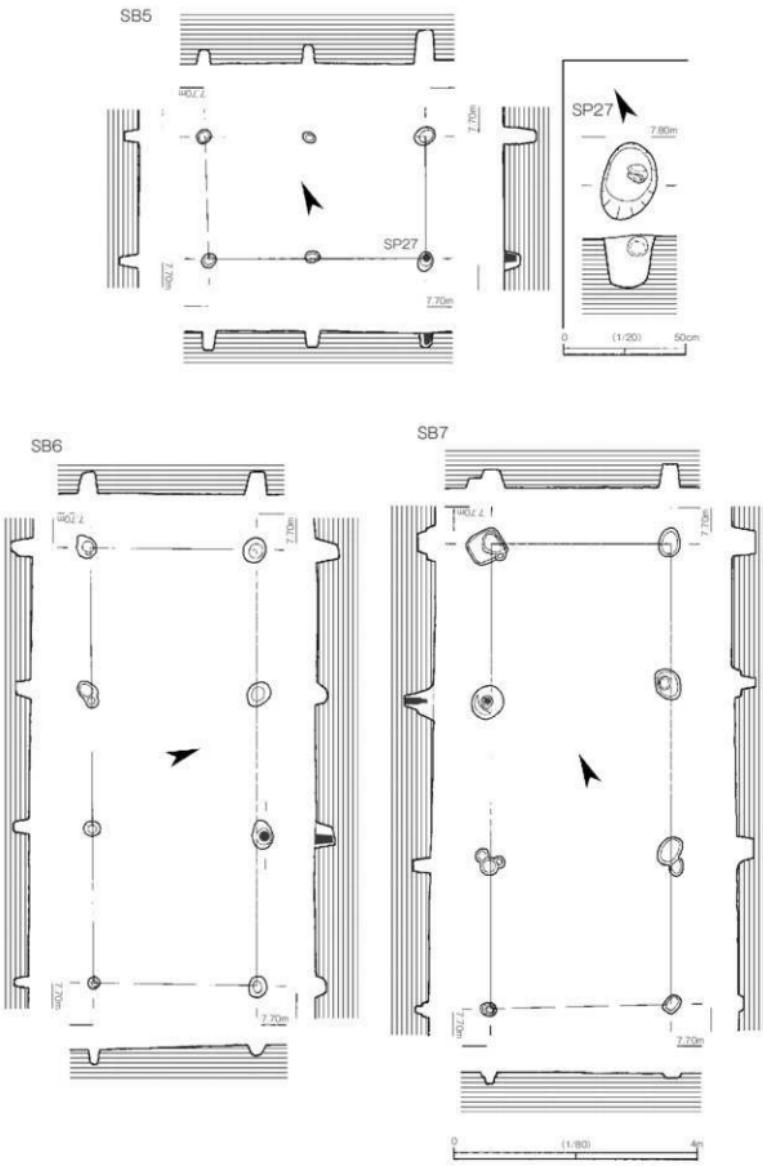


図6 XI地区検出遺構(1)

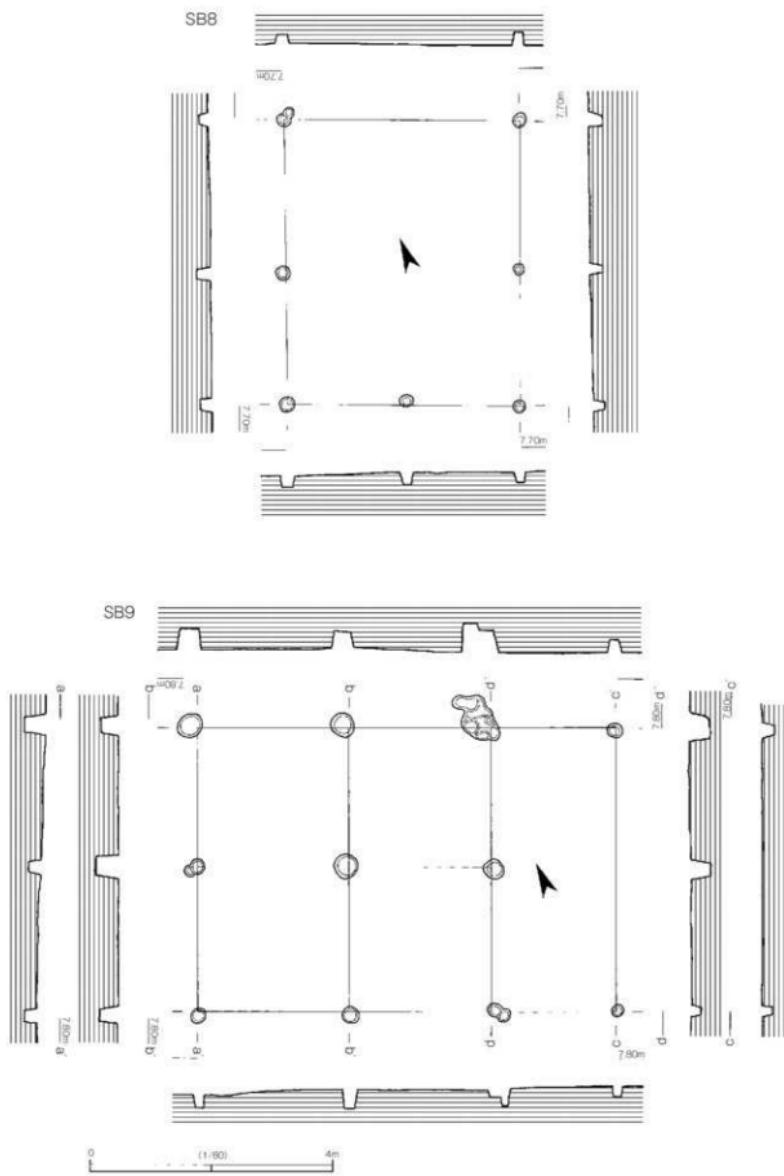


図7 XI地区検出遺構(2)

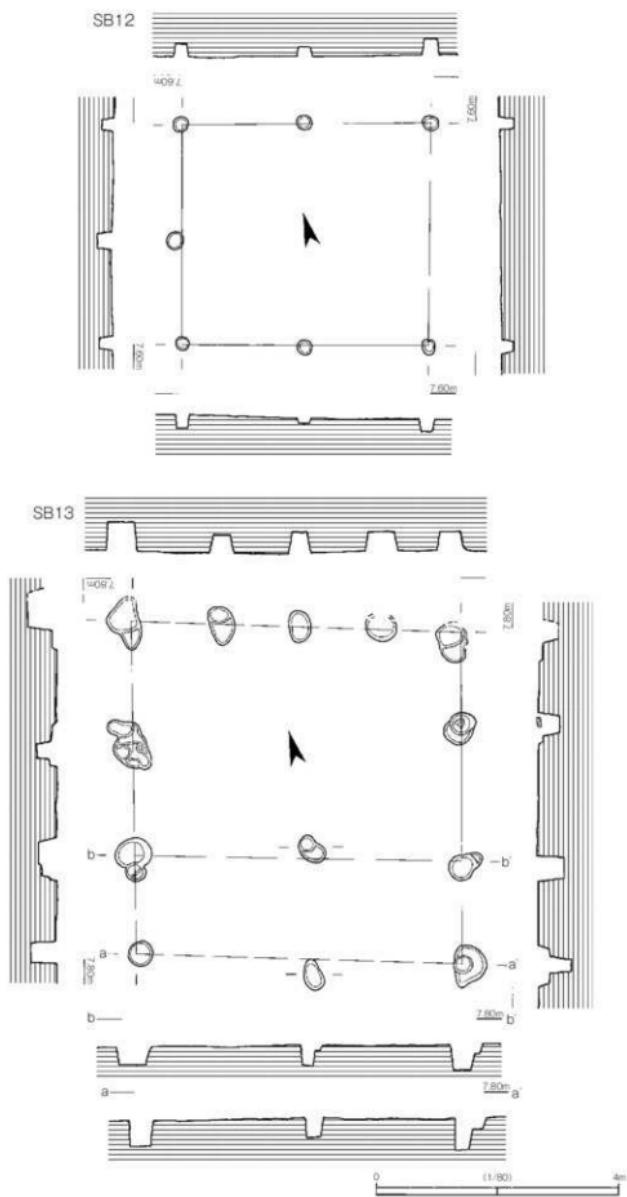


図8 XI地区検出遺構(3)

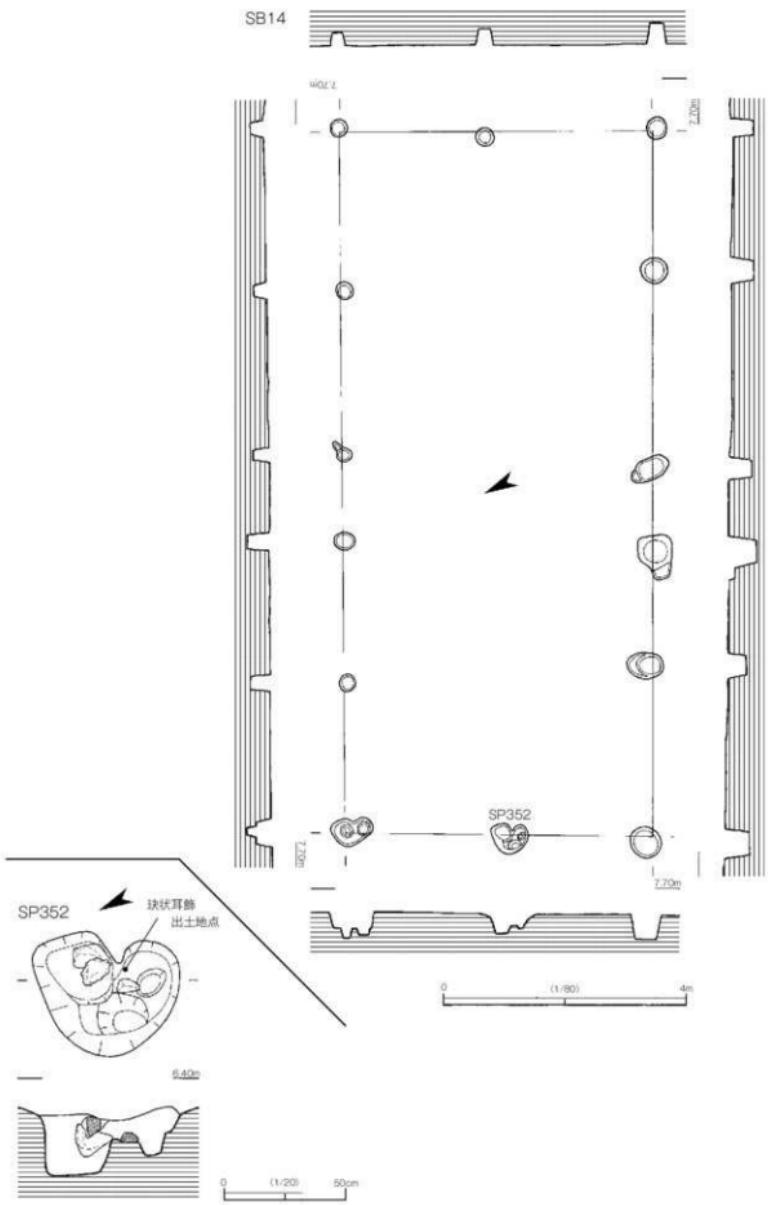


図9 XI地区検出遺構（4）

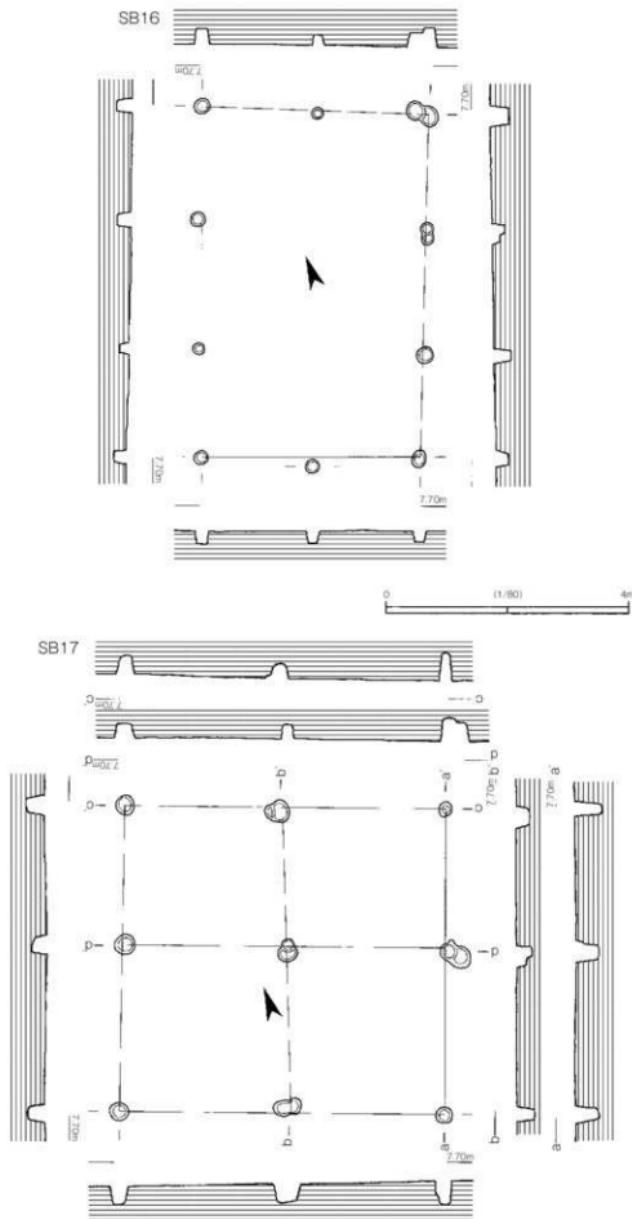


図10 XI地区検出遺構（5）

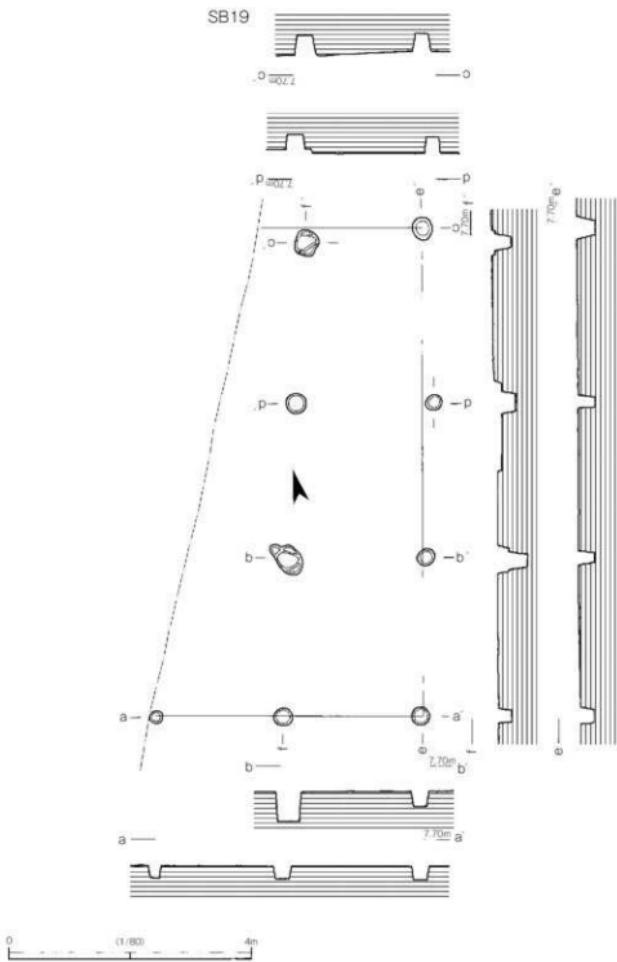


図11 XI地区検出遺構 (6)

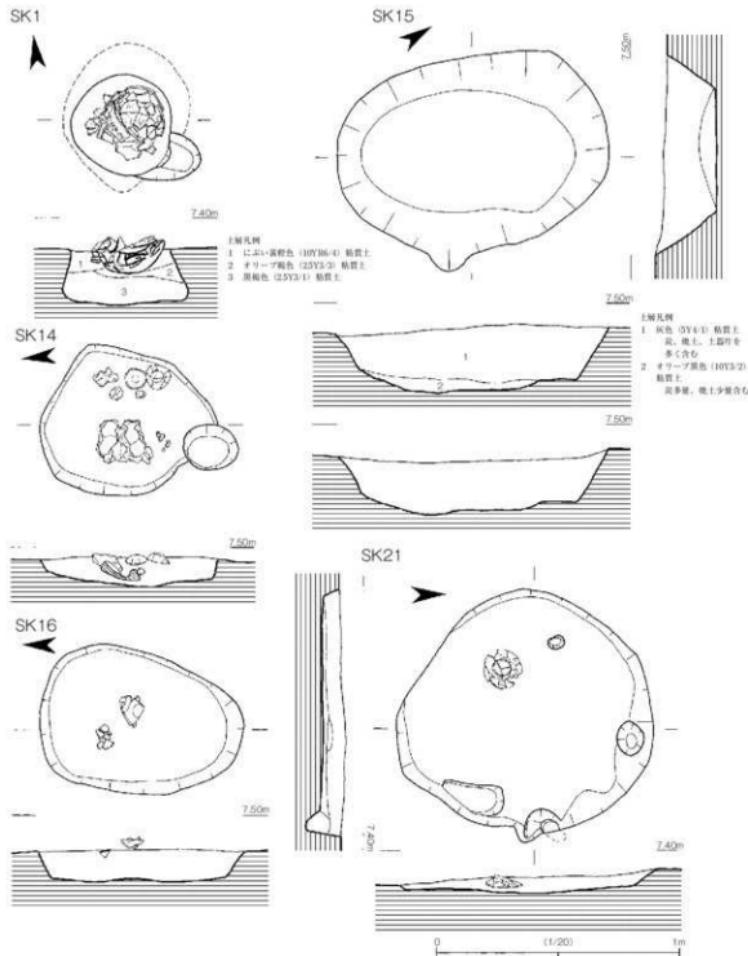


図12 XI地区検出構造(7)

(3) XII地区

堀立柱建物

SB21（図13） XII地区中央部の南側に位置する建物跡で、桁行2間（5.0m）×梁行1間（1.9m）、床面積9.50m²を測る。棟方向はN68°Wである。構成柱穴であるSP429からは土師器の皿（142）と壇（143）が出土した。これらの遺物から判断して、この建物は古代末～中世前半期に位置付けられよう。

(4) XIII地区

掘立柱建物

SB27（図15） XIII地区中央部に位置する総柱の建物跡で、桁行2間（4.6m）×梁行2間（4.2m）、床面積19.32m²を測る。棟方向はN64°Wで、重複するSB28～SB30、近接するSB31・SB32とはほぼ同じである。構成柱穴からは土師器の塊や壺（171・174～176）、土師質土器の鍋（172・173）が出土しており、これらの遺物から判断して、本掘立柱建物の年代は中世前半期と考えることができる。

SB28（図15） XIII地区中央部に位置する建物跡で、桁行2間（3.8m）×梁行1間（2.5m）、床面積9.50m²を測る。棟方向はN64°Wで、SB27・SB29と重複する。構成柱穴からは土器片等が出土しており、これらの遺物からみて、本建物の所属時期は中世後半期まで降ることはないと言えるが、詳細な年代を絞り込むことは困難である。

SB29（図15） XIII地区中央部に位置する建物跡で、桁行2間（5.3m）×梁行1間（1.9m）、床面積10.07m²を測る。棟方向はN63°Wで、SB27・SB28と重複する。構成柱穴からは、土器片等が出土しているが、建物の年代を決定できるようなものは確認できなかった。

SB32（図15） XIII地区の西側に位置する建物跡で、桁行2間（4.7m）×梁行1間（2.4m）、床面積11.28m²を測る。棟方向はN68°W。構成柱穴からは、土師器片などが出土しているが、建物の年代を絞り込むことはできない。

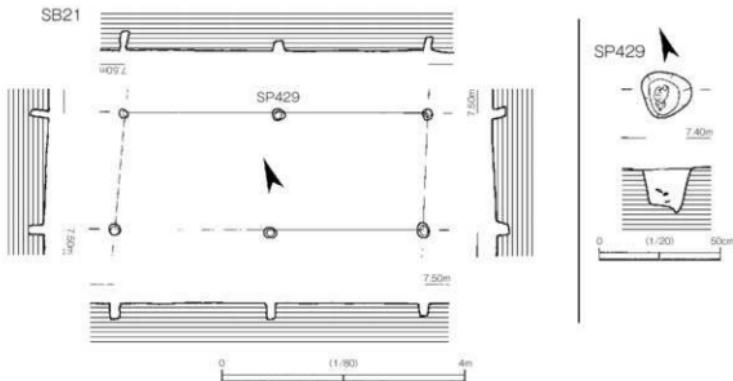


図13 XII地区検出遺構

土坑

SK33 (図16 図版15) Ⅹ地区の西半部南端に位置する。平面形は長軸165cm、短軸116cmの不整楕円形を呈する。深さは最大で15cm。埋土には焼土が多く含まれており、その中から土師器の壺(193~195)、壺(196~203)、土師質の甕(204~206)、三又トチン(207~209)等が大量に出土した。古代後期の廐棄土坑であると考えられる。

SK34 (図16 図版14) Ⅹ地区のほぼ中央に位置する。平面形は直径約55cmの円形を呈する。深さは35cm。埋土は褐灰色粘質土の單層で、遺構面に近い埋土上層から、土師器の壺(210・211)、延喜通寶(213)が出土しているが、その下から遺物は確認されていない。

遺構番号	地区	規模(間)	棟方向	柱間		面積(m ²)	出土遺物	備考
				短行	梁行			
				建物の南東隅から(m)	建物の南西隅から(m)			
SB1	X	2×2	N63°W	48(25・23)	44(22・22)	21.12	土師器	中世
SB2	X	2×1	N72°W	46(22・24)	1.3	5.98		
SB3	Ⅹ	2×1	N25°E	4.3(21・22)	3.6	15.48	縁輪陶器・土師器	古代
SB4	Ⅹ	2×1	N67°W	47(23・24)	2.4	11.28	黒色土器・土師器	
SB5	Ⅹ	2×1	N64°W	36(19・17)	2.1	7.56	土師器	中世
SB6	Ⅹ	3×1	N73°W	7.2(25・23・24)	2.7	19.44	土師器・頬窓器	
SB7	Ⅹ	3×1	N22°E	7.5(25・27・23)	3.0	22.50	土師器・瓦質土器	中世
SB8	Ⅹ	2×2	N21°E	47(23・24)	3.9(19・20)	18.33	土師器	
SB9	Ⅹ	3×2	N67°W	69(25・22・22)	4.6(23・23)	31.74	土師器	柱間北西隅から 中世
SB10	Ⅹ	2×1	N70°W	46(22・24)	2.7	12.42	土師器	中世
SB11	Ⅹ	1×2	N15°E	2.4	2.9(1.4・1.5)	6.96	土師器・頬窓器	南面に庇(1.3m) 中世
SB12	Ⅹ	2×2	N73°W	4.0(20・20)	3.6(1.7・1.9)	14.40	土師器・黑色土器	柱間南西隅から
SB13	Ⅹ	4×2	N71°W	5.6(12・13・13・16)	3.8(15・23)	20.52	土師器・瓦質土器	柱間北東隅から 南面に庇(1.6m) 古代
SB14	Ⅹ	5×2	N59°W	11.7(23・32・15・18・29)	5.2(28・24)	60.84	頬窓器	古代
SB15	Ⅹ	2×2	N20°E	5.9(29・30)	3.8(18・20)	22.42	土師器	中世
SB16	Ⅹ	3×2	N21°E	5.7(17・21・19)	3.6(18・18)	20.52	土師器・白磁	中世
SB17	Ⅹ	2×2	N69°W	5.4(26・28)	5.1(27・24)	27.54	土師器・縁輪陶器	
SB18	Ⅹ	2×1	N79°W	2.0(10・10)	1.3	2.60	土師器	柱間北西隅から
SB19	Ⅹ	(3×2)	N12°E	8.0(26・25・29)	4.3(23・20)	34.40	土師器・縁輪陶器	調査区分に統く 古代
SB20	Ⅹ	4×3	N69°W	7.5(20・19・16・20)	5.2(16・18・18)	39.00		柱間南西隅から
SB21	Ⅹ	2×1	N68°W	5.0(23・25)	1.9	9.50	土師器	中世
SB22	Ⅹ	2×2	N23°E	4.2(19・23)	3.8(20・18)	15.96		
SB23	Ⅹ	(2×1)	N70°W	4.5(24・21)	1.4	6.30	土師器	柱間北東隅から 調査区分に統く 可能性
SB24	Ⅹ	3×2	N72°W	7.4(26・26・22)	3.9(21・18)	28.86		柱間北東隅から
SB25	Ⅹ	2×2	N69°W	4.8(25・23)	4.3(21・22)	20.64		柱間南西隅から
SB26	Ⅹ	2×2	N68°W	3.2(19・13)	3.1(15・16)	9.92	土師器	
SB27	Ⅹ	2×2	N64°W	4.6(22・24)	4.2(21・21)	19.32	土師器	中世
SB28	Ⅹ	2×1	N64°W	3.8(21・17)	2.5	9.50	土師器・瓦質土器	
SB29	Ⅹ	2×1	N63°W	5.3(28・25)	1.9	10.07	土師器	
SB30	Ⅹ	2×2	N65°W	3.5(17・18)	2.7(18・09)	9.45	土師器	柱間北東隅から
SB31	Ⅹ	2×1	N65°W	4.2(20・22)	1.8	7.56	土師器	
SB32	Ⅹ	2×1	N68°W	4.7(23・24)	2.4	11.28	土師器	
SB33	Ⅹ	2×1	N69°W	3.9(23・16)	3.0	11.70		

表1 据立柱建物跡一覧表

※規格()は残存規格

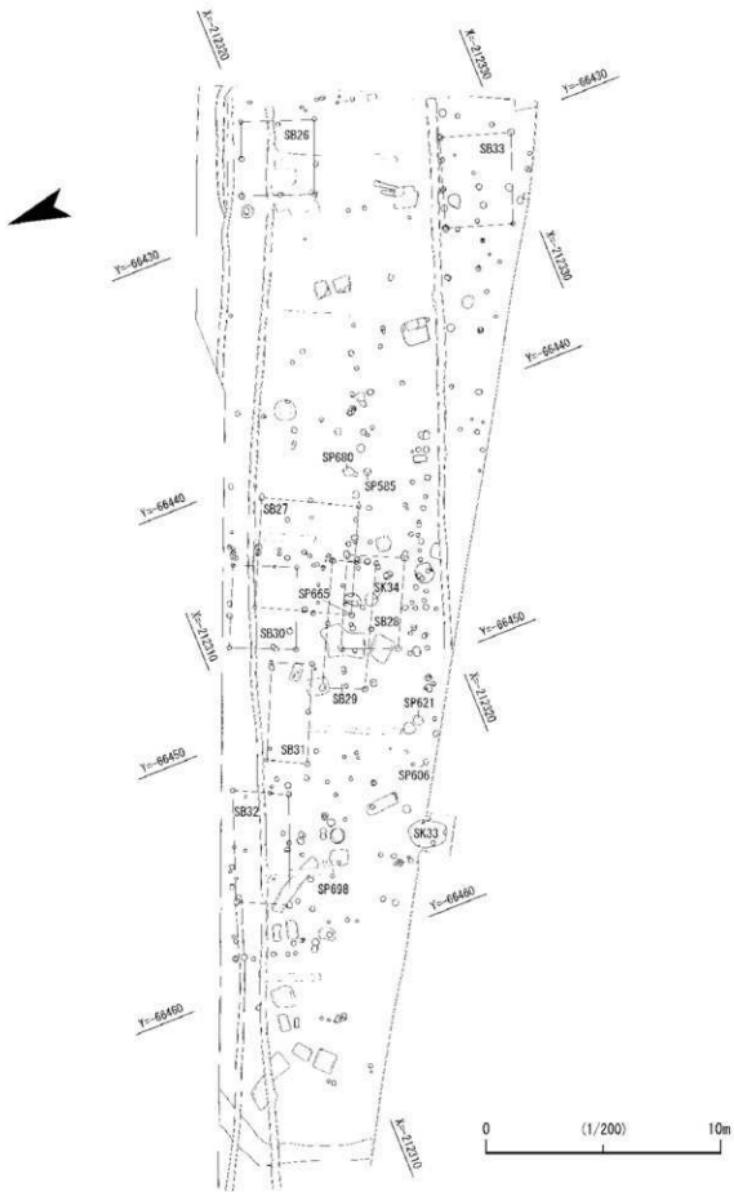


図14 新地区遺構配置図

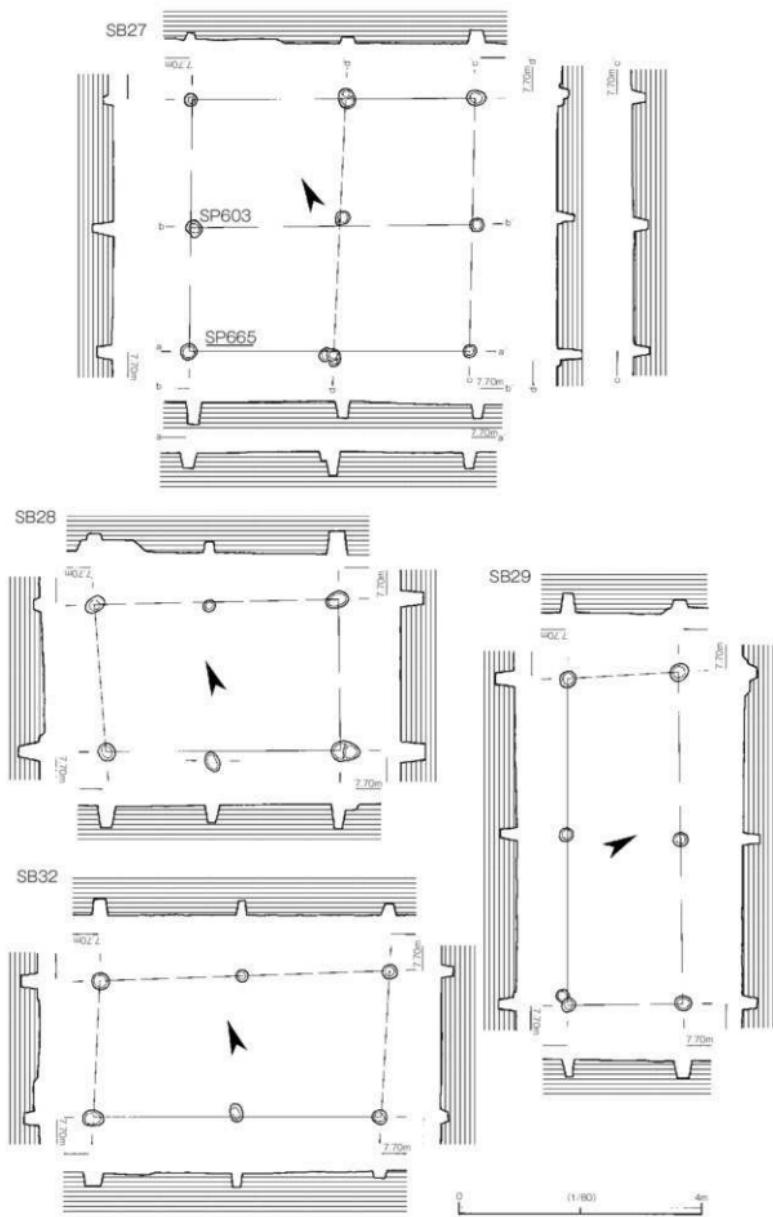


図15 X地区検出構造(1)

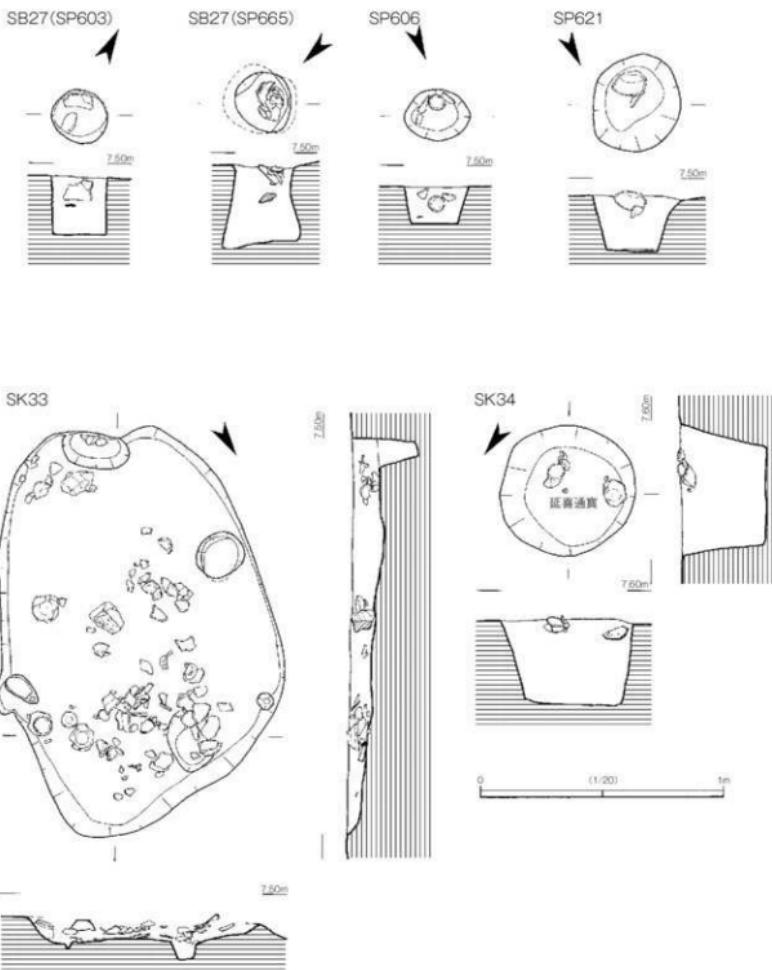


図16 新地区検出遺構（2）

3 遺物

今回の調査では、古代～中世を中心とする遺物を得ることができた。ここでは調査区ごとにその概要について説明を行う。

(1) X地区出土遺物

1・2はSB 1の各柱穴から出土したもので、1は土師器塊、2は壺であるが、口縁部分が残存しない。3～8はSP 6から出土した一括資料である。3・4は土師器塊でいずれも灰白色系の色調を呈する。5は壺であり、体部は直線的に立ち上がる。7は須恵器鉢と考えられるが、底部がほとんど残存しないため、復元した器形には疑問も残る。6・8は土師器甕で、6は口縁部が受け口状の形態を呈し、褐色系の色調であるのに対して、8は口縁部がゆるやかに外反し、灰白色系の色調を呈する。

9～30は包含層出土の土器・土製品である。9は須恵器壺身であるが、焼成不良で土師質に近い。10は青磁褐彩片で水注の胴部片になると考えられる。長沙窯系の可能性がある。11は青磁盤で、内面には条線状の彫り込みが認められる。12は青磁碗で口縁部がなめらかに外反する形態を呈す。13・14は玉環状口縁を呈する白磁碗、15は緑釉陶器である。16は灰釉陶器の平甕で、内底面には圓線状の釉溜まりが認められる。17は須恵質の羽釜と考えられ、形態や胎土などから搬入品である可能性も否定できない。18は柱状高台の土師器塊、19は土師器塊である。20は瓦質の搗鉢、21～23は足鍋の口縁～胴部で、いずれも瓦質焼成。24～27は足鍋脚部で、24・27は瓦質、25・26は土師質である。28は瓦質の搗鉢、29は瓦質足鍋の口縁部と考えられる。30は土鍾で、孔径は約0.3cmである。

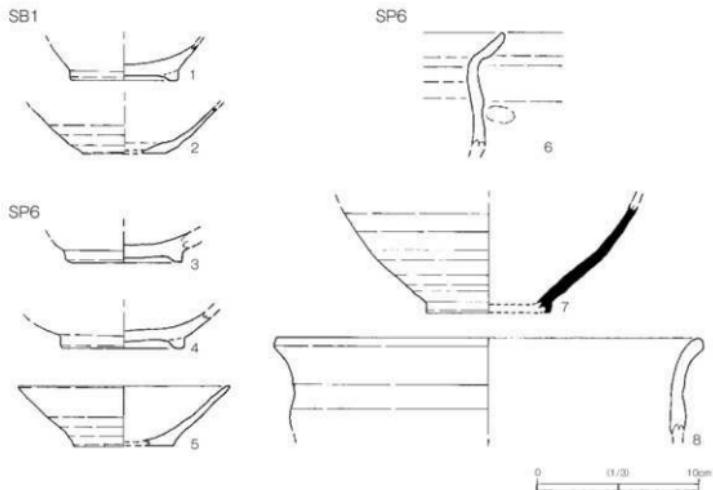


図17 X地区出土遺物(1)

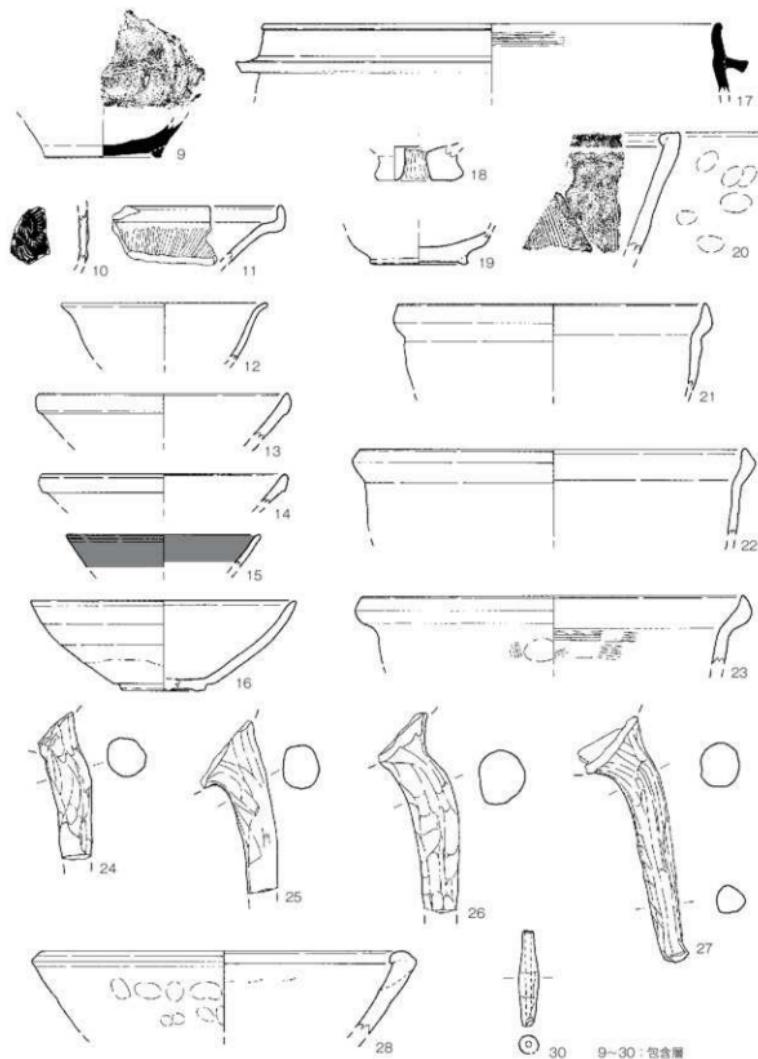


図18 X地区出土遺物(2)

(2) XI地区出土遺物

31~49は各掘立柱建物から出土した遺物である。31はSB 3から出土した緑釉陶器の皿、34はSB 4から出土した黒色土器の壺である。35~38はSB 7から出土した土器群であり、35は足鍋口縁部片で瓦質焼成、36・37は橙色系の土師器皿、38は土師質の器台口縁部と考えられる。41はSB11から出土した土師器壺で、灰白色系の色調を呈す。42・43はSB14から出土。ともに須恵器壺身で、43は口縁部がなめらかに外反する。44・45はSB15から出土したもので、44は橙色系の土師器皿、45は灰白色を呈する土師器壺である。46・47はSB16から出土。46は灰白色系の土師器壺、47は白磁碗の高台部である。48・49はSB19から出土したもので、48は土師器壺、49は土師質の甕である。

50~84は各柱穴から出土した遺物である。52・53はSP96から出土したもので、53は黒色土器壺。54・55はSP98から出土。54は橙色系の土師器壺、55は土師質の羽釜である。56・57はSP109から出土した土師器皿で両者とも灰白色を呈する。58・59はSP119から出土したもので、59は瓦質の足鍋。64はSP167から出土した土師器壺で、色調は褐灰色を呈す。68・69はSP210から出土したもので、68は灰釉陶器皿、69は土師器壺であり灰白色系の色調を呈する。73はSP265から出土した土師器壺で、灰白色系の色調を呈す。74はSP350から出土したもので、須恵器の鉢である。78~82はSP700から出土

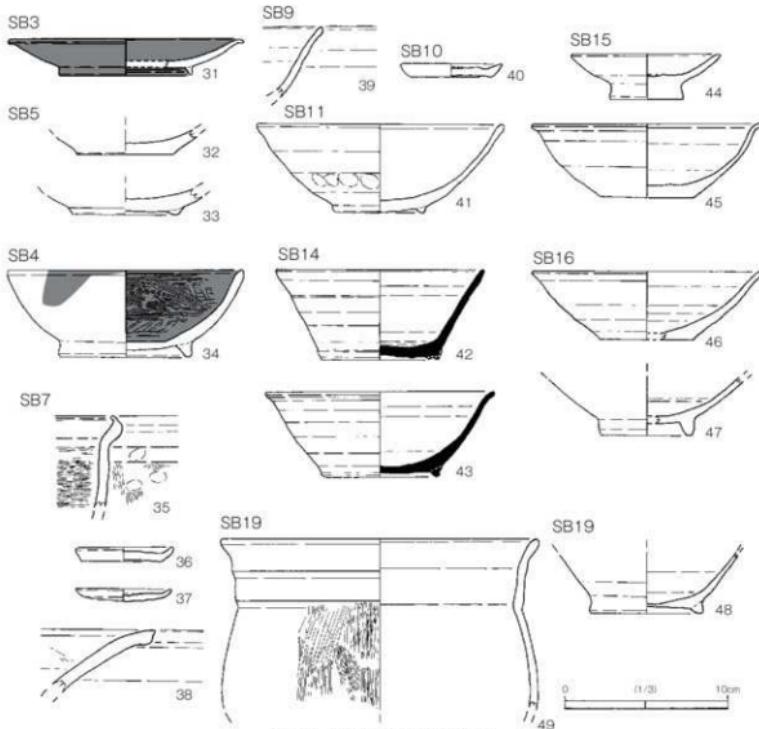


図19 XI地区出土遺物（1）

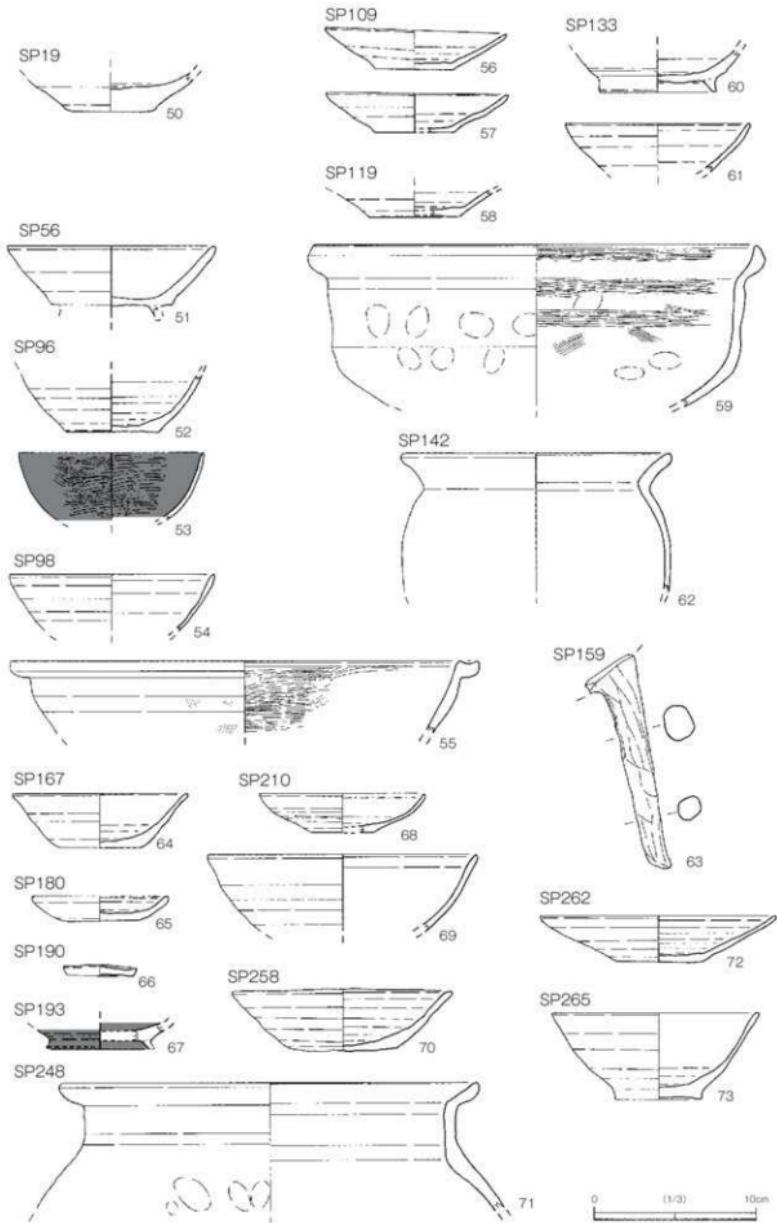


図20 XI地区出土遺物(2)

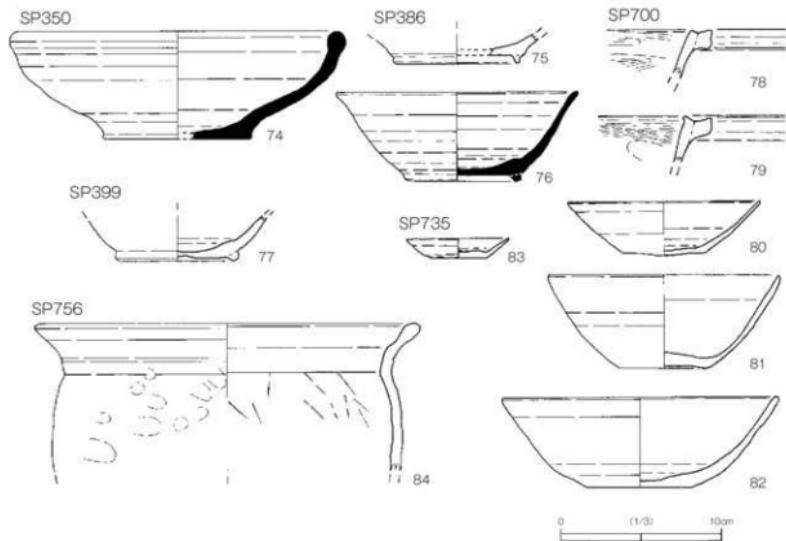


図21 XI地区出土遺物（3）

した一括資料で、80～82は灰白色系の壺であり、いずれも器壁が薄く仕上げられている。

85～101は各土坑から出土した土器である。85はSK 2から出土した灰白色系の壺。86は須恵器壺身でSK 3とSK 7から出土した破片が接合した事例である。88・89はいずれもSK14から出土した土師器皿で色調は黄橙色を呈す。93～96はSK22から出土した一括資料であり、93は土師器壺の底部、94は須恵器壺身であり、95は須恵器壺の肩部であると考えられる。98・99はSK24出土の土師器、100はSK28から出土した須恵器耳皿である。101はSK 1から出土した古墳時代の土師器甕であり、外面には刷毛目調整、内面にはケズリ痕跡が認められ、肩部付近に3条1単位のヘラ記号が施されている。

102～119は溝状造構や性格不明造構から出土した遺物である。107～109の擂鉢はいずれも瓦質焼成。112は緑釉陶器の壺と考えられる。114は須恵器の小壺、118・119の羽釜はいずれも瓦質土器である。

120～141は包含層から出土した遺物である。125～127は緑釉陶器で、127は内・外底面ともにトチンの接地痕が確認される。135は土師質の鉢と考えられるが、形態や胎土などから在地のものではない可能性もある。138は支脚状土製品、139は柱状高台付皿である。140は土錘で、孔径約0.3cmを測る。足鍋は136が土師質で、137は瓦質である。141は土師質の大型鍋で復元口径53.6cmを測る。

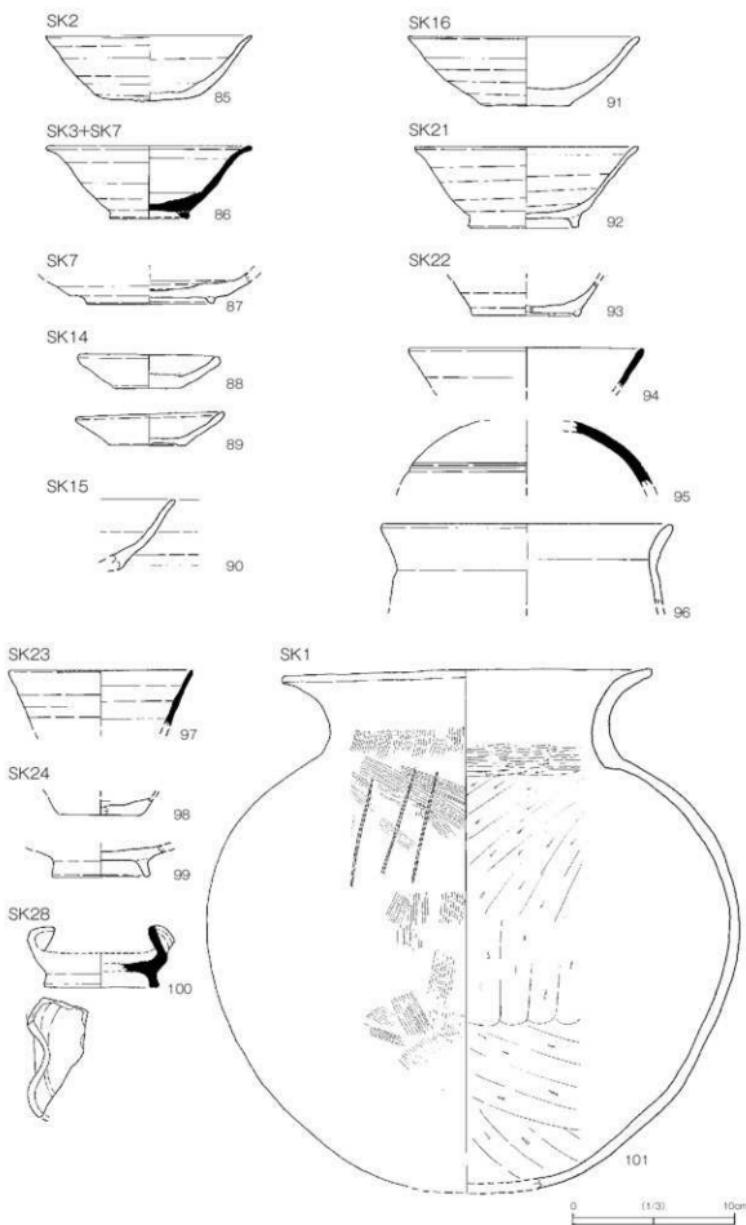


図22 XI地区出土遺物(4)

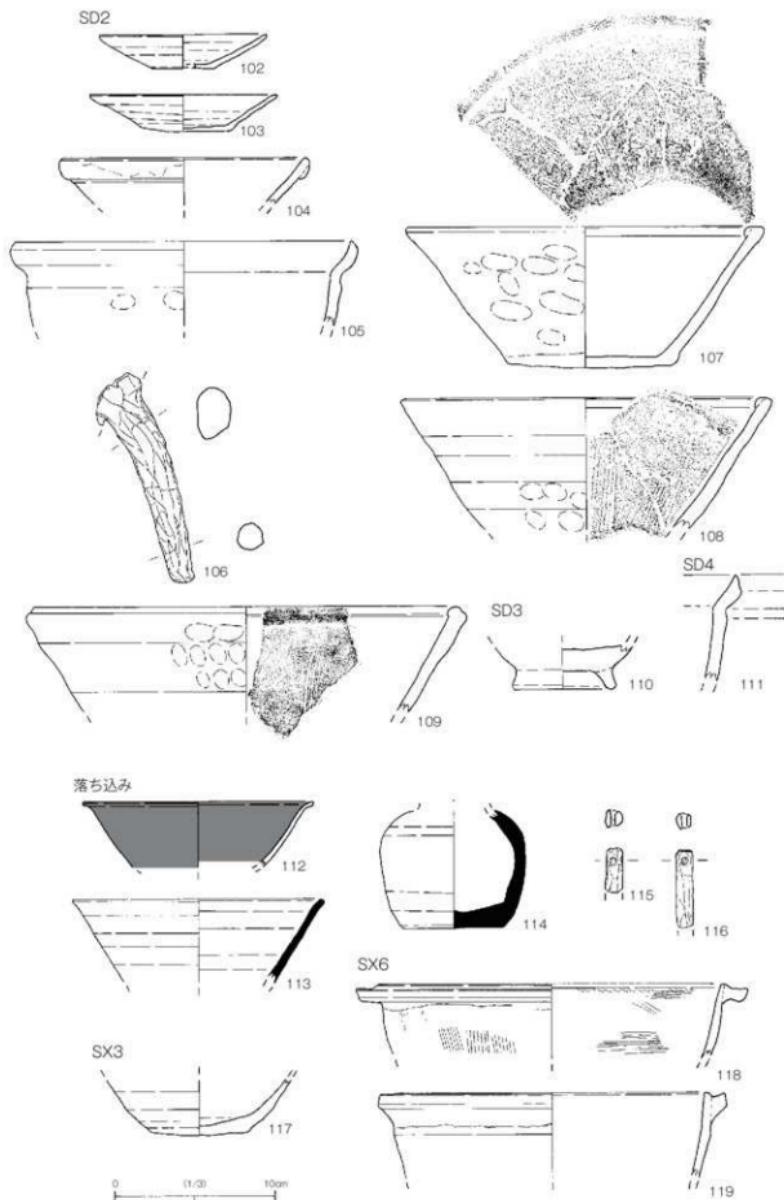


図23 XI地区出土遺物（5）

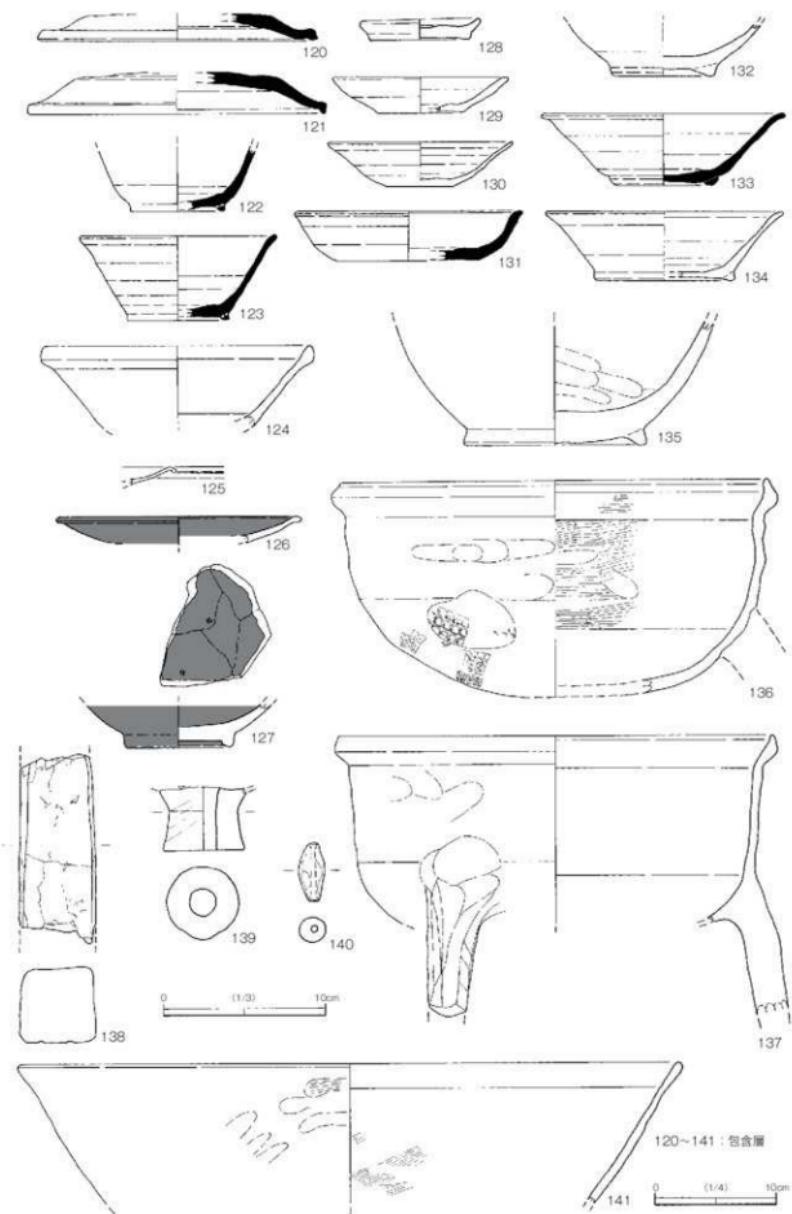


图24 XI地区出土遗物(6)

(3) XII地区出土遺物

142・143はSB21を構成する柱穴から出土した土師器である。142は橙色系の色調を呈する皿で器壁が比較的厚い。143は橙色系の色調を呈し、口縁部はなめらかに外反する。底部を欠くが、塊と考えられる。

144はSP403から、145はSP492から出土した土師器皿であり、いずれも浅い黄橙色を呈する。146はSP435から出土した足鍋脚部で、土師質である。147はSP462から出土した土師器壺の底部で、色調は灰白色を呈する。148～150はSP475から出土した一括資料で、いずれも橙色系の色調を呈する土師器壺である。

151～163は溝状造構から出土した遺物である。153は龍泉窯系の青磁片であり、152の土師器壺とともにSD 7から出土した。154・159は須恵器で、154は壺の頸部、159は大甕の口縁部である。156は土師器塊で、内外面ともに灰色系の色調を呈し、内面には丁寧なミガキ痕跡が認められる。

164～170は包含層出土の遺物である。166は瓦質土器の壺口縁部で、内面には平行タタキの痕跡がわずかに認められる。167は備前系壺の口縁部、168は土師質の足鍋である。169・170は土鍤で、169は孔径約0.4cm、170は孔径0.4～0.5cmを測る。

(4) XIII地区出土遺物

171～176はSB27の各柱穴から出土した遺物である。171は土師器塊と考えられ、172・173は土師質の鍋である。174・175は土師器壺で、若干橙色味を帯びた色調を呈す。176は橙色系の土師器塊である。

177～192は各柱穴から出土した遺物である。177～179はSP565から出土したもので、179は東播系の鉢である。180・181はSP566より出土したもので、前者は橙色系、後者は灰白色系の色調を呈す。

186・187はSP621から出土。186は土師器壺で橙色系の色調を呈し、187は灰白色系の土師器塊である。

188はSP649から出土した土師質の羽釜であり、191はSP698から出土した灰白色系の土師器塊である。

193～209はSK33出土の遺物である。193～195は土師器壺で、いずれも淡橙色系の色調を呈するが、195は外底面に炭素が吸着しており、黒色化している。197～202は塊の底部で、いずれも外側へ強く張り出す高台形状である。203は全形が窺える資料で、内湾気味に立ち上がる体部形態を呈し、灰白

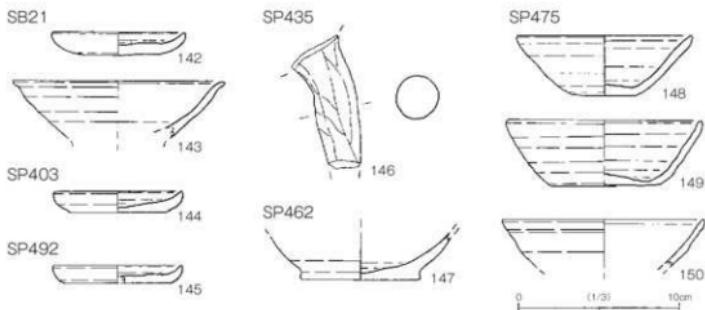


図25 XII地区出土遺物（1）

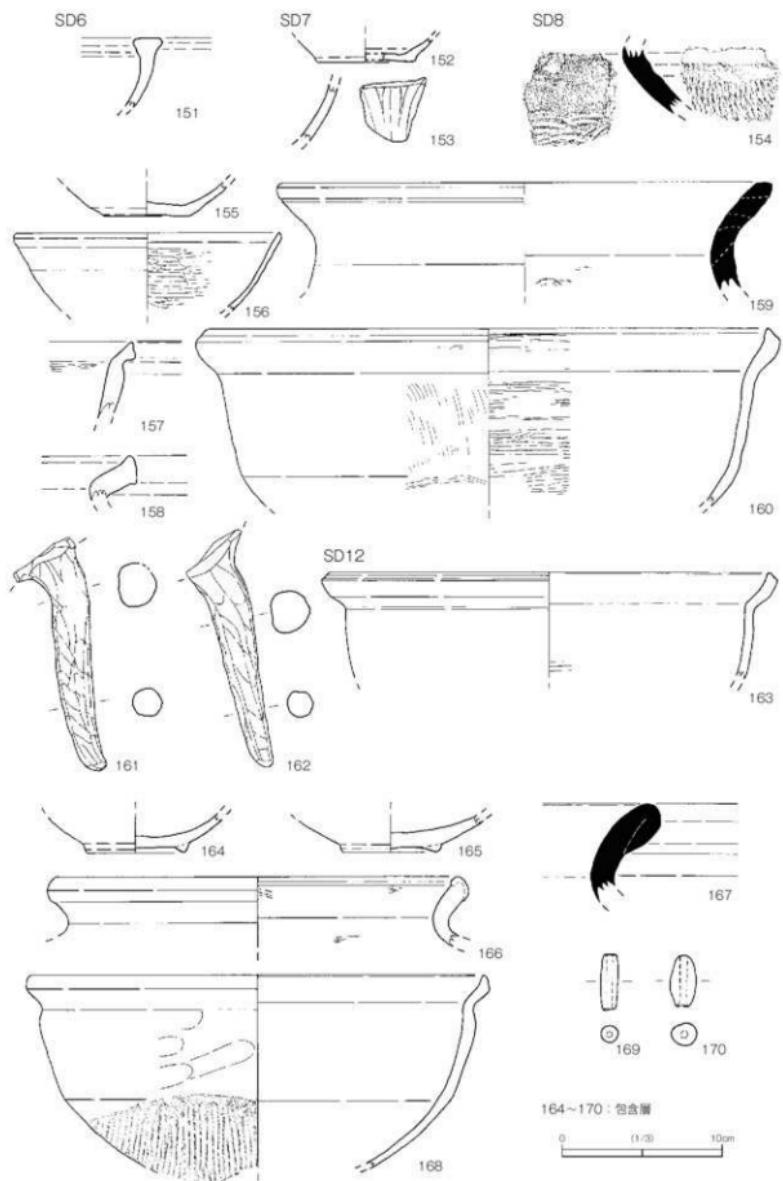


図26 XII地区出土遺物(2)

色系の色調である。204~206は土師質の甕で、205の口縁部付近には縁軸が付着しており、色見の可能性もある。207~209は三叉トチンで、いずれも先端部に縁軸が付着している。210・211はSK34から出土した土師器甕であり、両者とも淡灰色系の色調を呈する。なお、これらの土器は図29~213に示した延喜通寶と共に伴した。212はSD14から出土した瓦質土器の鍋である。

(5) 各地区出土の金属・石製品

213は XIII 地区 SK34 から出土した延喜通寶（初鑄：907年）である。214は残存状態が悪く、文字も判読できないが、大きさからみて延喜通寶であると考えられる。XIII 地区の SP555 から出土した。215~217は輸入銭で、いずれも遺物包含層から出土した。215は紹聖元寶、216は皇宋元寶、217は永樂通寶である。218~221は煙管。

222は縄文時代の玦状耳飾で、SB14の構成柱穴である SP352 より出土した。淡緑色の色調を呈し、石材は翡翠の可能性もある。223も玦状耳飾の可能性が高い。XIII 地区包含層からの出土で、滑石製である。224は石帶の一部で黒色粘板岩製。XI 地区包含層から出土した。225は弥生時代の扁平片刃石斧、226は縄文時代の所産と考えられる磨製石斧、227は磨石である。228・229は滑石製の石鍋。

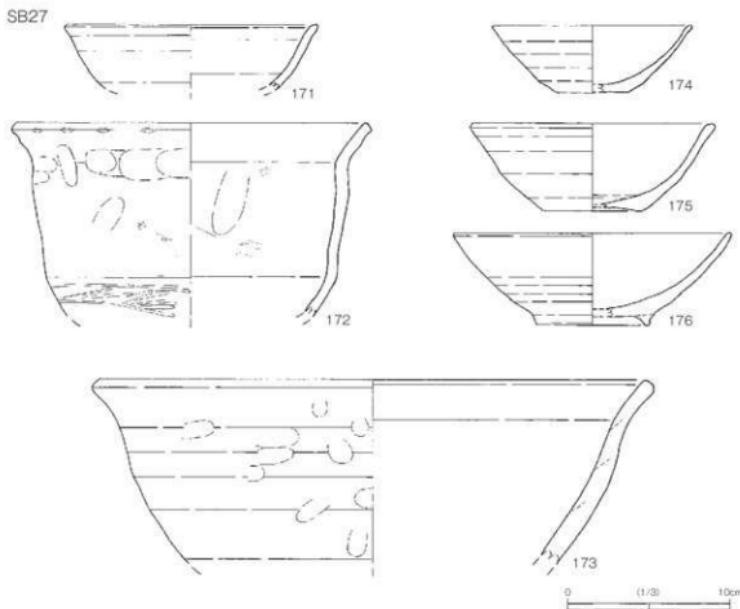


図27 XIII地区出土遺物（1）

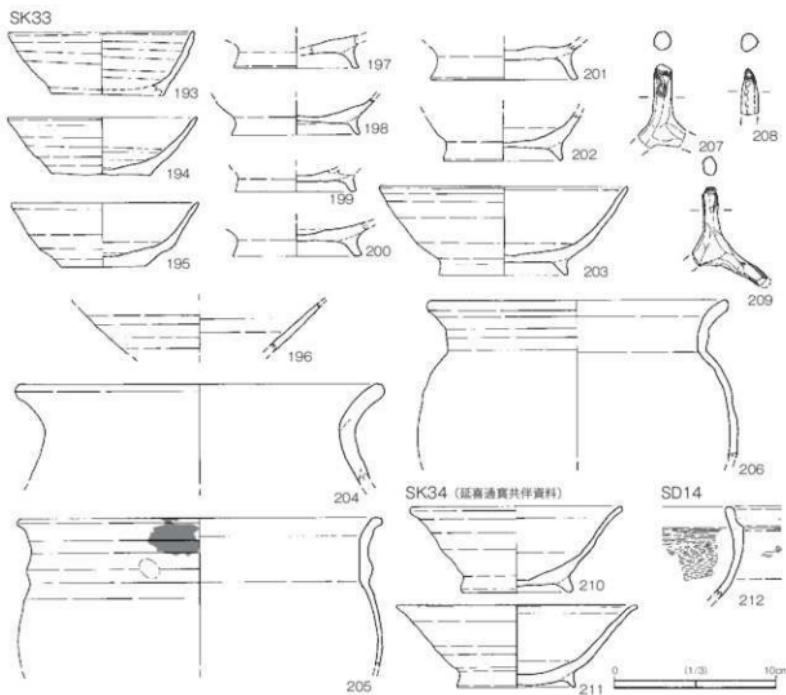
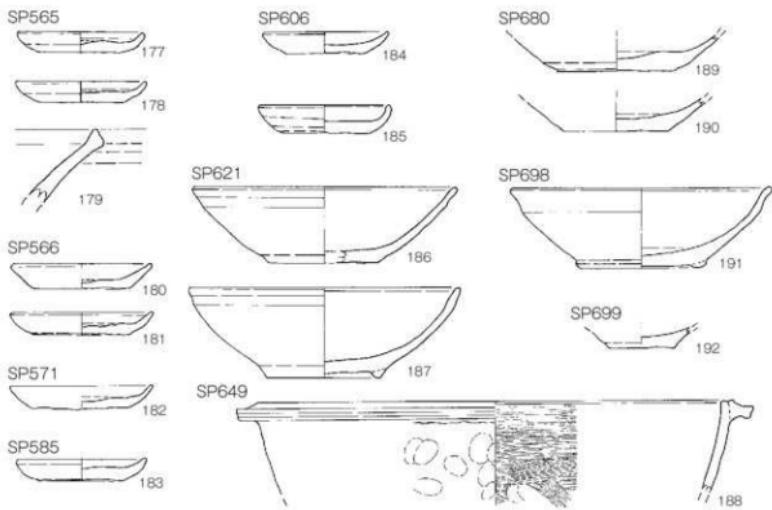


図28 XX地区出土遺物(2)

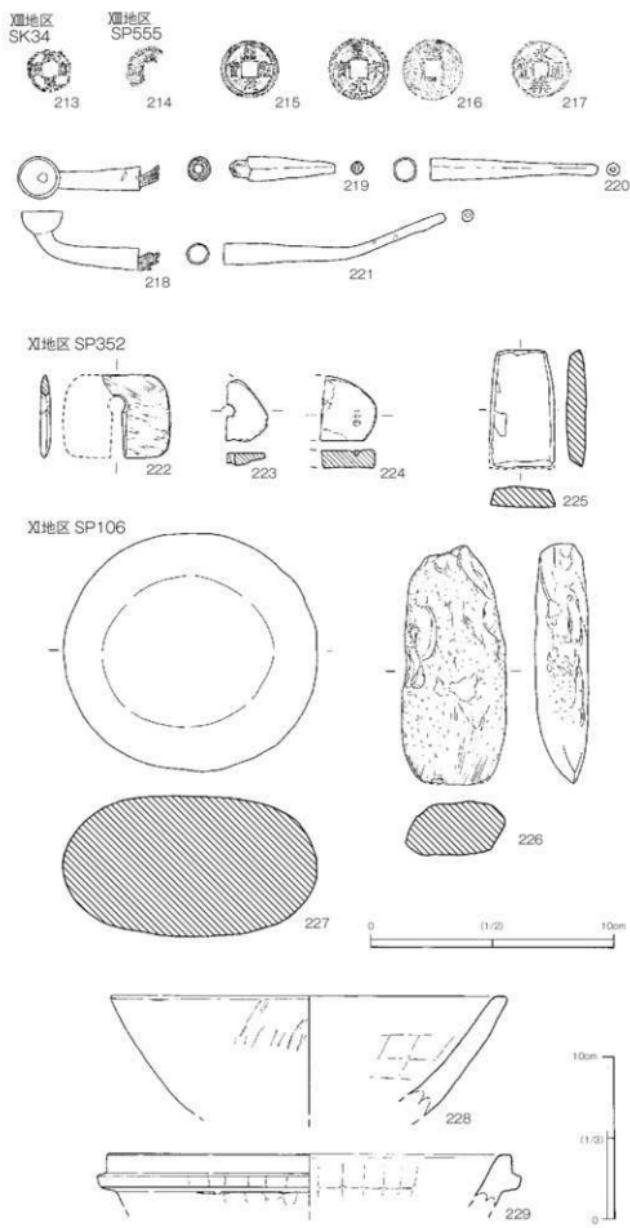


表2 出土土器・土製品観察表

番号	地区	遺構	種別	器種	法量(cm)(復元値)			胎土		焼成	色調		調整
					口径	器高	底径	粗密	砂粒		内面	外面	
1	X	SB 1 (SP 3)	土器	壺	-	22残	6.6	密	少量	軟質	灰白色	灰白色	回転ナダ
2	X	SB 1 (SP10)	土器	壺	-	29残	(5.0)	密	多量	やや硬質	にぶい橙色	にぶい橙色	回転ナダ
3	X	SP 6	土器	壺	-	19残	7.0	密	多量	やや硬質	灰白色	灰白色	回転ナダ後 崩ナダ
4	X	SP 6	土器	壺	-	23残	7.4	密	多量	軟質	浅黄橙色	灰白色	回転ナダ後 崩ナダ
5	X	SP 6	土器	壺	(13.0)	3.7	(6.0)	やや粗い	多量	やや硬質	灰白色	にぶい黄橙色	回転ナダ
6	X	SP 6	土器	壺	-	7.0残	-	粗い	無多量	硬質	明褐色	赤灰色	ナダ、 ヘラ削り
7	X	SP 6	頸壺器	鉢?	-	6.7残	(7.4)	密	少量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナダ
8	X	SP 6	土器	壺	(26.0)	5.9残	-	やや密	多量	やや硬質	灰白色	灰白色	崩ナダ
9	X	包含層	頸壺器	壺	-	23残	(7.2)	やや粗い	多量	やや硬質	灰赤色	黄褐色	回転ナダ
10	X	包含層	青磁陶彩	水注	-	3.3残	-	密	含まない	やや硬質	灰黄色	黑褐色	回転ナダ
11	X	包含層	青磁	盤	(20.8)	3.5残	-	密	少量	硬質	暗オリーブ色	暗オリーブ色	回転ナダ、 ヘラ削り
12	X	包含層	青磁	楕	(12.6)	5.5残	-	やや粗い	少量	硬質	胎土 灰白色	胎 オリーブ灰色	回転ナダ
13	X	包含層	白磁	楕	(15.2)	2.8残	-	やや粗い	含まない	硬質	灰白色	灰白色	回転ナダ
14	X	包含層	白磁	楕	(15.2)	1.8残	-	やや粗い	含まない	硬質	灰白色	灰白色	回転ナダ
15	X	包含層	綠釉陶器	旗	(11.9)	2.0残	-	やや粗い	少量	やや硬質	胎土 灰白色	胎 灰白色	回転ナダ
16	X	包含層	灰釉陶器	壺	(17.0)	(11.0)	(4.6)	粗い	少量	硬質	胎土 灰白色	胎 オリーブ色	回転ナダ
17	X	包含層	頸壺器	羽釜	(28.0)	4.3残	-	やや粗い	やや多い	硬質	灰白色	灰白色	回転ナダ、 ハケ目 ナダ
18	X	包含層	土器	柱状筒瓦瓶	-	21残	4.5	密	多量	やや硬質	にぶい橙色	にぶい橙色	ナダ
19	X	包含層	土器	壺	-	20残	6.0	密	含まない	軟質	浅黄橙色	灰白色	丁寧なナダ
20	X	包含層	瓦質土器	擂鉢	-	7.4残	-	やや粗い	多量	硬質	青灰色	青灰色	ナダ、 7条削目 ナダ
21	X	包含層	瓦質土器	足鍋	(18.6)	5.2残	-	粗い	多量	硬質	灰	にぶい黄褐色	崩ナダ
22	X	包含層	瓦質土器	足鍋	(23.8)	5.2残	-	粗い	やや多い	硬質	灰	灰	崩ナダ
23	X	包含層	瓦質土器	足鍋	(23.2)	4.1残	-	粗い	多量	硬質	灰白色	灰白色	横ハケ後 ナダ
24	X	包含層	瓦質土器	足鍋(脚)	-	9.0残	-	密	多量	やや硬質	灰白色	灰白色	指ナダ
25	X	包含層	土師質土器	足鍋(脚)	-	11.0残	-	密	多量	硬質	にぶい橙色	暗灰色	指ナダ
26	X	包含層	土師質土器	足鍋(脚)	-	12.2残	-	密	多量	硬質	浅黃色	浅黃色	指ナダ
27	X	包含層	瓦質土器	足鍋(脚)	-	15.1残	-	粗い	多量	硬質	灰白色	灰	指ナダ
28	X	包含層	瓦質土器	擂鉢	(12.2)	5.0残	-	やや粗い	やや多い	硬質	灰	灰	丁寧なナダ
29	X	包含層	瓦質土器	足鍋	(33.0)	6.2残	-	やや粗い	多量	やや硬質	暗灰色	暗灰色	指ナダ
30	X	包含層	土製品	土鉢	径1.2	長さ5.8	孔径0.3	密	含まない	硬質	灰白色	灰白色	-
31	X	SB 3 (SP725)	綠釉陶器	皿	(14.6)	2.2	(8.3)	密	少量	硬質	胎土 灰白色	胎 緑色	回転ナダ
32	X	SB 5 (SP27)	土器	壺	-	15残	5.8	密	多量	やや硬質	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナダ、 ナダ
33	X	SB 5 (SP27)	土器	壺	-	17残	6.5	密	多量	やや硬質	暗灰色	明褐色	回転ナダ、 丁寧なナダ
34	X	SB 4 (SP30)	黒色土器	壺	(14.3)	5.4	8.0	やや粗い	多量	硬質	黑	灰白色	回転ナダ後 ミガキ
													崩減

番号	地区	遺構	種別	器種	法量(cm)(復元値)			粘土		焼成	色調		調整		
					口径	器高	底径	粗密	砂粒		内面	外面			
35	II	SB7(SP730)	瓦質土器	足鍋	-	5.6	-	やや粗い	少量	硬質	灰白色	灰白色	横ハケ、 横ナデ	縦ハケ後 ナデ	
36	II	SB7(SP144)	土師器	瓶	5.8	0.9	4.9	密	少量	硬質	淡橙色	浅黄橙色	回転ナデ、 糸切り後ナデ	回転ナデ、 糸切り、板日仕組	
37	II	SB7(SP144)	土師器	瓶	(5.8)	0.8	(4.8)	密	少量	硬質	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ、 糸切り	
38	II	SB7(SP144)	土質土器	器台?	-	(3.9)	-	粗い	多量	硬質	灰褐色	に赤い橙色	ハケ後ナデ	横ナデ、ナデ	
39	II	SB9(SP52)	土師器	壺?	-	4.3	残	やや粗い	極多量	硬質	褐灰色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ	
40	II	SB10(SP371)	土師器	瓶	(6.2)	0.8	(5.0)	やや粗い	少量	硬質	橙色	橙色	回転ナデ、 ナデ	回転ナデ、 糸切り	
41	II	SB11(SP359)	土師器	壺	(15.1)	5.4	(5.4)	密	少量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ、 丁寧なナデ	指圧え後 回転ナデ	
42	II	SB14(SP361)	頸壺器	环身	(12.8)	5.5	7.2	やや粗い	やや多い	硬質	に赤い黄褐色	に赤い黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	
43	II	SB14(SP702)	頸壺器	环身	(14.1)	5.2	7.3	密	少量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ	
44	II	SB15(SP301)	土師器	瓶	(9.2)	2.8	4.5	密	多量	極めて硬質	浅黄橙色	に赤い橙色	回転ナデ	回転ナデ、 糸切り	
45	II	SB15(SP301)	土師器	壺	14.2	4.6	5.4	密	少量	やや硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、 糸切り	
46	II	SB16(SP332)	土師器	壺	(14.0)	4.2	(5.8)	密	少量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、 糸切り	
47	II	SB16(SP388)	白磁	瓶	-	3.6	残	(5.8)	密	少量	硬質	胎 灰白色	回転ナデ	ヘラ削り	
48	II	SB19(SP323)	土師器	壺	-	3.8	残	6.8	やや粗い	少量	硬質	明糊灰褐色	明糊灰褐色	回転ナデ	回転ナデ、 糸切り後ナデ
49	II	SB19(SP349)	土質土器	甕	(19.4)	10.4	残	やや粗い	少量	やや硬質	に赤い黄褐色	に赤い黄褐色	横ナデ、 ナデ	横ハケ、 胎ナデ	
50	II	SP19	土師器	壺	-	2.4	残	(5.4)	密	少量	軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、 板日仕組
51	II	SP56	土師器	壺	(12.8)	4.4	残	-	密	多量	硬質	灰白色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ
52	II	SP96	土師器	壺	-	3.6	残	5.6	やや密	多量	やや硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ
53	II	SP96	黒色土器	壺	(11.4)	4.1	残	-	密	やや多い	硬質	黑色	黑色	密なハラミガキ	密なハラミガキ
54	II	SP98	土師器	壺	(12.6)	3.5	残	-	やや粗い	含まない	硬質	に赤い橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ
55	II	SP98	土質土器	羽釜	(28.8)	4.5	残	-	やや粗い	少量	硬質	に赤い橙色	に赤い赤褐色	横ハケ	横ハケ後 ナデ
56	II	SP109	土師器	瓶	11.0	2.5	4.8	密	極少量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ ナデ	回転ナデ、 糸切り、板日仕組	
57	II	SP109	土師器	瓶	11.0	2.5	4.8	密	少量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ ナデ	回転ナデ、 糸切り	
58	II	SP119	土師器	瓶	-	1.7	残	(5.6)	やや粗い	やや多い	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ ナデ	回転ナデ、 糸切り、板日仕組
59	II	SP119	瓦質土器	足鍋	(27.0)	9.9	残	-	粗い	やや多い	硬質	灰色	灰白色	横ハケ後 ナデ	指圧え、ナデ
60	II	SP133	土師器	壺	-	2.6	残	7.1	やや粗い	多量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ ナデ	回転ナデ
61	II	SP133	土師器	壺?	(11.3)	2.9	残	-	やや粗い	やや多い	極めて硬質	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ
62	II	SP142	土質土器	甕	(16.6)	8.5	残	-	粗い	極多量	硬質	明糊灰褐色	灰白色	ナデ	ナデ
63	II	SP150	土質土器	足鍋(脚)	-	12.5	残	-	粗い	やや多い	硬質	浅黄橙色	褐灰色	指ナデ	指ナデ
64	II	SP167	土師器	壺	(10.8)	3.3	5.0	やや粗い	多量	硬質	褐灰色	褐灰色	回転ナデ	回転ナデ、 糸切り後ナデ	
65	II	SP180	土師器	瓶	(8.4)	1.6	4.8	密	極少量	硬質	灰白色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ、 糸切り	
66	II	SP190	土師器	瓶	4.6	0.7	4.1	やや粗い	やや多い	硬質	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ、 糸切り	
67	II	SP193	綠釉陶器	壺	-	1.6	残	(6.6)	密	極少量	硬質	胎 灰白色	胎 灰黄色	回転ナデ	回転ナデ
68	II	SP220	灰釉陶器	瓶	(10.2)	2.4	残	(3.8)	密	少量	硬質	胎 灰白色	胎 灰黄色	回転ナデ	回転ナデ

番号	地区	造構	種別	器種	法量(cm)(復元値)			粘土		焼成	色調		調整	
					口径	器高	底径	粗密	砂粒		内面	外面		
					(mm)									
69	XII	SP210	土師器	壺	(16.6)	4.7残	-	密	少量	やや硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ
70	XII	SP258	土師器	壺	13.6	3.8	6.8	密	多量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、 希切り、板目
71	XII	SP248	土師質土器	甕	(25.5)	7.9残	-	粗い	多量	硬質	灰白色	灰褐色	指ナデ、 ヘラナデ	ナデ、指圧さえ ぬナデ
72	XII	SP262	土師器	瓶	(14.5)	2.8	5.3	極密	やや多い	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ、 ナデ	回転ナデ、 希切り後ナデ
73	XII	SP265	土師器	壺	(12.7)	5.3	5.3	やや粗い	多量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ、 ナデ	回転ナデ、 希切り後ナデ
74	XII	SP250	須恵器	鉢	(19.6)	6.6	(8.8)	密	少量	硬質	灰色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、 板目希切り
75	XII	SP286	土師器	壺	-	1.8残	(7.4)	やや粗い	やや多い	やや硬質	灰黄色	灰黄色	回転ナデ	回転ナデ、 ナデ
76	XII	SP386	須恵器	壺身	(14.8)	5.5	7.1	やや粗い	多量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、 ナデ
77	XII	SP399	土師器	壺	-	2.8残	7.0	やや粗い	多量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ
78	XII	SP700	土師質土器	羽釜	-	2.9残	-	密	極少量	硬質	灰白色	灰黄褐色	横ハケ	横ナデ
79	XII	SP700	土師質土器	羽釜	-	3.0残	-	密	極少量	硬質	灰黄褐色	褐灰色	横ハケ後 ナデ	ナデ
80	XII	SP700	土師器	壺	(11.7)	3.3	(5.2)	密	少量	硬質	にぶい橙色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、 希切り、板目压痕
81	XII	SP700	土師器	壺	(14.1)	5.7	5.4	密	少量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、 回転希切り
82	XII	SP700	土師器	壺	(16.8)	5.5	(6.4)	密	少量	硬質	黄灰色	灰黄色	回転ナデ	回転ナデ、 希切り後ナデ
83	XII	SP735	土師器	瓶	6.3	1.2	3.5	密	極少量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、 希切り、板目
84	XII	SP756	土師質土器	甕?	(23.6)	9.0残	-	密	極多量	硬質	明褐色灰色	灰白色	ナデ、 ヘラナデ	ナデ、 指圧さえ後ナデ
85	XII	SK2	土師器	壺	(12.6)	4.0	6.5	やや密	多量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、 ナデ、板目压痕
86	XII	SK3・7	須恵器	壺身	(12.6)	5.5	(4.8)	極密	やや多い	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、 ヘラ削り
87	XII	SK7	土師器	瓶?	-	1.9残	(7.8)	密	多量	硬質	にぶい褐色	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ、 ナデ
88	XII	SK14	土師器	瓶	8.7	2.1	4.1	密	少量	硬質	浅黄褐色	浅黄褐色	回転ナデ	回転ナデ、 板目希切り
89	XII	SK14	土師器	瓶	9.1	2.1	4.6	密	多量	硬質	浅黄褐色	にぶい黄褐色	回転ナデ	回転ナデ、 希切り、板目压痕
90	XII	SK15	土師器	壺?	-	4.3残	-	やや粗い	多量	やや硬質	灰白色	明褐色灰色	回転ナデ	回転ナデ
91	XII	SK16	土師器	壺	(14.1)	5.2	5.4	密	少量	硬質	浅黄褐色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、 回転希切り
92	XII	SK21	土師器	壺	13.6	5.0	6.7	密	多量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、 板目压痕
93	XII	SK22	土師器	壺	-	2.2残	(6.6)	やや粗い	多量	やや硬質	灰白色	明褐色灰色	回転ナデ	回転ナデ、 ナデ
94	XII	SK22	須恵器	壺身	(14.3)	2.4	-	やや粗い	多量	硬質	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ、 沈線
95	XII	SK22	須恵器	甕?	-	4.0残	-	密	少量	硬質	灰白色	灰色	回転ナデ	回転ナデ
96	XII	SK22	土師質土器	甕	(17.6)	5.0残	-	やや粗い	多量	硬質	にぶい橙色	にぶい橙色	横ナデ	横ナデ
97	XII	SK23	須恵器	壺	(11.2)	3.4残	-	密	やや多い	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ
98	XII	SK24	土師器	壺	-	1.1残	(4.9)	密	少量	やや硬質	黄灰色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、 回転希切り
99	XII	SK24	土師器	壺	-	2.0残	(6.0)	密	やや多い	やや硬質	暗灰色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、 ナデ
100	XII	SK28	須恵器	耳皿	(9.0)	3.7	(7.0)	やや粗い	多量	硬質	明青灰色	青灰色	回転ナデ	回転ナデ
101	XII	SK1	土師器	甕	22.5	31.8残	-	密	多量	硬質	橙色	にぶい橙色	横ナデ、 ケズリ	横ナデ、 記号記号

番号	地区	造構	種別	器種	法量(cm)(復元値)			胎土		焼成	色調		調整
					口径	器高	底径	粗密	砂粒		内面	外面	
102	戸	SD 2	土師器	瓶	(10.2)	2.05	(3.9)	やや粗い	多量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナダ 輪転ナダ、 希望り、板目
103	戸	SD 2	土師器	瓶	11.5	2.25	5.5	密	やや多い	硬質	灰白色	灰白色	回転ナダ 輪転ナダ、 板目圧痕
104	戸	SD 2	白磁	碗	(14.9)	2.9残	-	やや粗い	含まない	硬質	胎土 灰白色	胎 灰白色	回転ナダ 輪転ナダ、 へラナダ
105	戸	SD 2	土師質土器	足鍋	(20.6)	5.2残	-	密	多量	硬質	灰黃褐色	灰黃褐色	丁寧なナダ 指なだ
106	戸	SD 2	瓦質土器	足鍋(脚)	-	13.4残	-	密	多量	硬質	灰白色	灰色	指立え、 指ナダ
107	戸	SD 2	瓦質土器	擂鉢	(22.0)	8.6	10.4	粗い	多量	やや硬質	灰白色	灰白色	丁寧なナダ、 7条目
108	戸	SD 2	瓦質土器	擂鉢	(22.8)	8.0残	-	密	多量	硬質	灰白色	灰白色	丁寧なナダ、 7条目
109	戸	SD 2	瓦質土器	擂鉢	(26.0)	6.4残	-	粗い	多量	硬質	黑色	暗灰色	丁寧なナダ、 指目
110	戸	SD 3	土師器	塊	-	2.7残	6.1	密	やや多い	軟質	灰白色	灰白色	回転ナダ 横ナダ、 指立え後ナダ
111	戸	SD 4	土師質土器	足鍋	-	6.5残	-	やや粗い	多量	硬質	黄褐色	灰白色	丁寧なナダ
112	戸	不整形落ち込み	綠釉陶器	塊?	(14.2)	4.0残	-	密	含まない	やや硬質	胎土 灰白色	胎 綠色	回転ナダ 回転ナダ
113	戸	不整形落ち込み	須恵器	环	(15.4)	5.1残	-	やや粗い	多量	硬質	灰色	灰色	回転ナダ 回転ナダ
114	戸	不整形落ち込み	須恵器	小壺	-	7.2残	6.2	やや粗い	やや多い	硬質	灰色	灰色	回転ナダ ヘラナダ?
115	戸	不要形落ち込み	土製品	土錘	径1.1	2.8残	孔径0.2	やや粗い	多量	硬質	橙色	橙色	指ナダ 指ナダ
116	戸	不整形落ち込み	土製品	土錘	径1.0	4.8残	孔径0.3	密	多量	硬質	赤い赤褐色	赤褐色	丁寧なナダ 丁寧なナダ
117	戸	SX 3	土師器	环	-	3.4残	(6.0)	密	多量	やや硬質	褐灰色	灰白色	回転ナダ 横ハケ後 横ナダ
118	戸	SX 6	瓦質土器	羽釜	(21.0)	4.6残	-	密	少量	やや硬質	灰色	暗灰色	横ハケ後 横ナダ
119	戸	SX 6	瓦質土器	羽釜	(19.2)	5.2残	-	密	少量	硬質	灰色	褐灰色	横ナダ、 指立え後ナダ
120	戸	包含層	須恵器	环蓋	(16.7)	1.6残	-	密	少量	硬質	青灰色	青灰色	回転ナダ 回転ナダ
121	戸	包含層	須恵器	环蓋	(18.1)	2.5残	-	密	少量	硬質	灰色	灰色	回転ナダ 回転ナダ
122	戸	包含層	須恵器	环	-	3.9残	(5.8)	密	少量	硬質	灰色	灰白色	回転ナダ 輪転ナダ、 ヘラ切り
123	戸	包含層	須恵器	环	(12.0)	5.1	(6.1)	密	少量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナダ 希望り、板目圧痕
124	戸	包含層	白磁	碗	(16.0)	5.0残	-	密	含まない	硬質	胎土 灰白色	胎 灰白色	回転ナダ 回転ナダ
125	戸	包含層	綠釉陶器	瓶?	-	1.2残	-	密	含まない	やや硬質	胎土 浅黄褐色	胎 灰白色	回転ナダ 回転ナダ
126	戸	包含層	綠釉陶器	瓶?	(15.0)	1.6残	-	密	少量	やや硬質	胎土 浅黄褐色	胎 灰白色	回転ナダ 回転ナダ
127	戸	包含層	綠釉陶器	塊	-	2.6残	6.5	密	少量	やや硬質	胎土 浅黄褐色	オーリーブ黄褐色	回転ナダ、 トナード路
128	戸	包含層	土師器	瓶	7.3	1.3	6.0	密	少量	硬質	褐色	褐色	回転ナダ 切切り後ナダ
129	戸	包含層	土師器	瓶	(11.3)	2.7	4.1	密	少量	硬質	灰赤色	明赤灰色	回転ナダ 希望り、 板目圧痕
130	戸	包含層	土師器	瓶	(14.0)	3.0	(8.6)	密	多量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナダ 希望り、 板目圧痕
131	戸	包含層	須恵器	瓶	-	3.2残	6.0	密	少量	硬質	灰色	回転ナダ	回転ナダ、 希望り後ナダ
132	戸	包含層	土師器	塊	-	7.5残	(11.2)	やや粗い	多量	やや硬質	褐色	褐色	回転ナダ後 丁寧なナダ
133	戸	包含層	須恵器	环	15.0	4.4	6.0	密	少量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナダ 希望り、 板目圧痕
134	戸	包含層	土師器	鉢	-	7.5残	(11.2)	やや粗い	多量	やや硬質	浅黄褐色	浅黄褐色	回転ナダ 希望
135	戸	包含層	土師質土器	足鍋	-	26.0	13.2残	24.6	密	少量	硬質	灰白色	指ナダ 磨滅
136	戸	包含層	土師質土器	足鍋	-	26.0	13.2残	24.6	密	少量	硬質	灰白色	横ハケ後 ナダ ナダ、 格子タタキ

番号	地区	造構	種別	器種	法量(cm)(復元値)			胎土		焼成	色調		調整
					口径	器高	底径	粗密	砂粒		内面	外面	
137	■	包含層	瓦質土器	足鍋	(26.6)	17.1残	(24.4)	密	少量	硬質	灰白色	黒色	横ナデ ナデ, ハケ目, 指圧え
138	■	包含層	土製品	支脚状 土製品	厚3-4.6	11.5残	-	密	少量	やや硬質	灰白色	灰白色	指圧え後 ナデ
139	■	包含層	土製品	柱状高台 付皿	-	3.8残	5.0	密	少量	硬質	浅黄褐色	浅黄褐色	丁寧なナデ, 回転系切り
140	■	包含層	土製品	土鉢	徑1.6	長さ3.6	孔径0.4	密	多量	硬質	にぶい橙色	にぶい橙色	丁寧なナデ
141	■	包含層	土師質土器	大鍋	(53.6)	11.5残	-	密	少量	硬質	にぶい橙色	陶灰色	横ハケ後 ナデ
142	■	SB21(SP429)	土師器	瓶	(8.0)	1.4	5.2	密	少量	硬質	淡橙色	褐色	回転ナデ, ナデ
143	■	SB21(SP429)	土師器	塊	(13.0)	3.5残	-	密	少量	硬質	灰白色	浅黄褐色	回転ナデ
144	■	SP463	土師器	瓶	(7.8)	1.3	(6.1)	密	少量	硬質	浅黄褐色	灰白色	回転ナデ, ナデ
145	■	SP492	土師器	瓶	(7.8)	1.1	(6.5)	密	少量	硬質	浅黄褐色	浅黄褐色	回転ナデ, ナデ
146	■	SP435	土師質土器	足鍋(脚)	徑2.6	7.8残	-	密	少量	硬質	陶灰色	陶灰色	指ナデ
147	■	SP462	土師器	塊	-	2.9残	(7.4)	密	少量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ, ナデ
148	■	SP475	土師器	塊	(10.8)	3.7	(4.1)	密	含まない	硬質	にぶい橙色	にぶい黄褐色	回転ナデ, ナデ
149	■	SP475	土師器	塊	12.0	4.0	6.9	密	少量	やや硬質	褐色	にぶい橙色	回転ナデ, ナデ
150	■	SP475	土師器	塊?	(12.4)	2.9残	-	密	少量	硬質	褐色	褐色	回転ナデ
151	■	SD 6	土師質土器	鍋	-	4.2残	-	密	少量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ
152	■	SD 7	土師器	塊	-	1.3残	(6.0)	密	少量	硬質	褐色	褐色	回転ナデ, 回転系切り
153	■	SD 7	青磁	瓶	-	3.5残	-	密	含まない	硬質	胎土 灰白色	胎 オリーブ黄色	回転ナデ
154	■	SD 8	須恵器	甕	-	4.3残	-	密	少量	硬質	灰褐色	灰褐色	横ナデ, 同心円文タキ
155	■	SD 8	土師器	塊	-	2.1残	5.2	密	少量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ
156	■	SD 8	土師器	塊	(16.2)	4.8残	-	極密	少量	硬質	灰褐色	灰褐色	ヘラミガキ, ナデ
157	■	SD 8	瓦質土器	足鍋	-	4.7残	-	密	少量	硬質	灰白色	灰褐色	横ハケ後 ナデ
158	■	SD 8	土師質土器	甕	-	2.6残	-	密	少量	硬質	灰白色	灰白色	横ナデ
159	■	SD 8	須恵器	大甕	(30.4)	6.6残	-	やや粗い	多量	硬質	青灰色	明青灰色	横ナデ, 同心円文タキ
160	■	SD 8・12	土師質土器	足鍋	(34.6)	10.8残	-	密	少量	硬質	明黄褐色	明黄褐色	横ハケ後 ナデ
161	■	SD 8	土師質土器	足鍋(脚)	徑2.2	14.2残	徑1.7	密	少量	硬質	にぶい赤橙色	赤褐色	指圧え, ナデ
162	■	SD 8	瓦質土器	足鍋(脚)	徑2.2	15.5残	徑1.5	密	少量	硬質	灰白色	にぶい橙色	指ナデ
163	■	SD12	土師質土器	足鍋	(27.0)	6.4残	-	密	多量	やや硬質	にぶい黄褐色	灰白色	横ハケ後 ナデ
164	■	包含層	土師器	塊	-	2.4残	6.0	密	含まない	硬質	淡橙色	淡橙色	丁寧なナデ
165	■	包含層	土師器	塊	-	2.3残	5.8	密	少量	硬質	淡橙色	淡橙色	丁寧なナデ
166	■	包含層	瓦質土器	甕	(24.8)	4.3残	-	密	多量	やや硬質	暗灰色	暗灰色	平行タキ後 横ナデ
167	■	包含層	備前系陶器	甕	-	6.0残	-	密	少量	硬質	灰褐色	灰褐色	横ナデ
168	■	包含層	土師質土器	足鍋	(27.8)	11.8残	-	密	少量	硬質	灰黃褐色	灰黃褐色	横ナデ
169	■	包含層	土製品	土鉢	徑1.1	長さ3.5	孔径0.4	密	少量	硬質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	指ナデ
170	■	包含層	土製品	土鉢	徑1.6	長さ3.2	孔径 0.4-0.5	密	やや多い	硬質	灰黃褐色	灰黃褐色	指ナデ

番号	地区	造構	種別	器種	法量(cm)(復元値)			粘土		焼成	色調		調整	
					口径	器高	底径	粗密	砂粒		内面	外面		
171	■■	SB27(SP603)	土師器	塊	(15.3)	3.9残	-	密	少量	硬質	灰黃褐色	灰白色	回転ナダ	回転ナダ
172	■■	SB27(SP603)	土師質土器	鍋	(21.4)	11.8残	-	密	多量	硬質	灰褐色	に赤い橙色	横ハケ後ナダ	横ハケ後ナダ、ヘルナダ
173	■■	SB27(SP604)	土師質土器	鍋	(34.4)	11.3残	-	粗い	無多量	極硬質	灰褐色	褐灰色	丁寧なヘルナダ	指込さえ後ナダ
174	■■	SB27(SP605)	土師器	环	(12.2)	4.1	(4.2)	密	少量	やや硬質	灰白色	淡橙色	回転ナダ	回転ナダ、回転系切り
175	■■	SB27(SP605)	土師器	环	(15.0)	5.3	(6.1)	密	少量	やや硬質	灰白色	に赤い橙色	回転ナダ	回転ナダ
176	■■	SB27(SP605)	土師器	塊	(17.0)	5.6	(5.9)	密	多量	やや硬質	淡橙色	淡橙色	回転ナダ	回転ナダ、回転系切り
177	■■	SP565	土師器	皿	7.6	1.3	5.1	密	少量	硬質	灰褐色	褐灰色	回転ナダ、ナダ	回転ナダ、回転系切り
178	■■	SP565	土師器	皿	(7.9)	1.3	(5.3)	密	少量	硬質	橙色	褐色	回転ナダ、ナダ	回転ナダ、回転系切り
179	■■	SP566	堅密系器	鉢	-	4.4残	-	密	少量	硬質	灰褐色	灰褐色	横ナダ	横ナダ
180	■■	SP566	土師器	皿	8.6	1.5	5.8	密	少量	硬質	橙色	褐色	回転ナダ、ナダ	回転ナダ、回転系切り
181	■■	SP566	土師器	皿	8.7	1.4	5.8	密	やや多い	やや硬質	灰白色	灰白色	回転ナダ、ナダ	回転ナダ、系切り、板状圧痕
182	■■	SP571	土師器	皿	(8.8)	1.5	(6.0)	密	含まない	硬質	灰白色	灰白色	回転ナダ、ナダ	回転ナダ、板状圧痕
183	■■	SP585	土師器	皿	7.9	1.4	5.2	密	やや多い	硬質	橙色	褐色	回転ナダ、ナダ	回転ナダ、系切り、板状圧痕
184	■■	SP606	土師器	皿	7.5	1.4	4.7	密	少量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナダ、ナダ	回転ナダ、回転系切り
185	■■	SP622	土師器	皿	8.1	1.7	5.3	密	やや多い	硬質	に赤い橙色	に赤い橙色	回転ナダ、ナダ	回転ナダ、系切り後ナダ
186	■■	SP621	土師器	环	(16.0)	4.7	(6.7)	密	少量	硬質	橙色	橙色	回転ナダ、丁寧なナダ	回転ナダ、系切り
187	■■	SP621	土師器	塊	(16.7)	5.5	7.0	密	含まない	硬質	灰白色	灰白色	回転ナダ、丁寧なナダ	回転ナダ、回転系切り
188	■■	SP649	土師質土器	羽釜	(29.2)	5.7	-	密	やや多い	硬質	灰褐色	に赤い橙色	横ハケ	指込さえ後ナダ
189	■■	SP680	土師器	环	-	22残	7.2	密	少量	硬質	橙色	褐色	回転ナダ、ナダ	回転ナダ、回転系切り
190	■■	SP680	土師器	环	-	20残	6.5	密	少量	硬質	橙色	橙色	回転ナダ、ナダ	回転ナダ、系切り後ナダ
191	■■	SP698	土師器	塊	15.8	4.9	7.1	密	無少量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナダ、丁寧なナダ	回転ナダ、系切り後ナダ
192	■■	SP699	土師器	环	-	13残	3.9	密	少量	硬質	灰白色	に赤い橙色	回転ナダ	崩滅
193	■■	SK33	土師器	环	11.4	3.9	7.1	密	少量	硬質	に赤い橙色	に赤い橙色	回転ナダ	回転ナダ
194	■■	SK33	土師器	环	(11.6)	3.5	6.2	密	少量	やや硬質	灰白色	浅黃褐色	回転ナダ、ナダ	回転ナダ、系切り後ナダ
195	■■	SK33	土師器	环	11.3	3.9	5.2	密	少量	硬質	灰白色	浅黃褐色	回転ナダ、ナダ	回転ナダ、系切り後ナダ
196	■■	SK33	土師器	塊?	-	31残	-	密	少量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナダ	回転ナダ
197	■■	SK33	土師器	塊	-	20残	(7.6)	密	無少量	やや硬質	灰白色	浅黃褐色	崩滅	崩滅
198	■■	SK33	土師器	塊	-	22残	(7.8)	極密	少量	やや硬質	灰白色	灰白色	崩滅	崩滅
199	■■	SK33	土師器	塊	-	13残	7.2	密	含まない	硬質	灰白色	灰白色	回転ナダ	回転ナダ、系切り後ナダ
200	■■	SK33	土師器	塊	-	21残	7.8	密	含まない	硬質	灰白色	灰白色	回転ナダ、ナダ	回転ナダ、ナダ
201	■■	SK33	土師器	塊	-	22残	9.1	密	含まない	硬質	灰白色	灰白色	回転ナダ、ナダ	回転ナダ、ナダ
202	■■	SK33	土師器	塊	-	30残	7.3	密	含まない	硬質	浅黃褐色	灰白色	回転ナダ	回転ナダ
203	■■	SK33	土師器	塊	15.0	5.4	7.9	密	含まない	硬質	灰白色	灰白色	回転ナダ、丁寧なナダ	回転ナダ、系切り後ナダ
204	■■	SK33	土師質土器	甕	(22.6)	6.2残	-	やや粗い	無多量	硬質	灰白色	浅黃褐色	ヘルナダ	横ナダ

番号	地区	遺構	種別	器種	法量(cm)(復元値)			胎土		色調		調整	
					口径	器高	底径	粗密	砂粒	焼成	内面	外面	
205	■■	SK33	土師質土器	甕	(224)	9.1残	-	やや粗い	多量	硬質	胎土 灰白色	釉 緑色	横ハケ後、 横ナデ 一部に輪台着
206	■■	SK33	土師質土器	甕	(186)	9.8残	-	密	多量	硬質	灰白色	灰白色	横ナデ
207	■■	SK33	土製品	三叉トチシ	11×12	長さ 5.0残	-	密	含まない	硬質	胎土 浅黄褐色	釉 紺オリーブ色	指ナデ
208	■■	SK33	土製品	三叉トチシ	12×10	長さ 2.8残	-	密	含まない	硬質	胎土 灰白色	釉 オリーブ色	指ナデ
209	■■	SK33	土製品	三叉トチシ	11×12	長さ 6.2残	-	密	含まない	硬質	胎土 灰白色	釉 オリーブ褐色	指ナデ
210	■■	SK34	土師器	塊	(130)	5.3	6.9	密	多量	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ、 丁寧なナデ ナデ
211	■■	SK34	土師器	塊	(148)	5.0	(72)	粗い	多量	硬質	灰黃褐色	ぬれ・黄褐色	回転ナデ、 丁寧なナデ ナデ
212	■■	SD14	瓦質土器	鍋	-	5.7残	-	密	少量	硬質	灰白色	灰黃色	横ハケ、 横ナデ
													横ハケ後 横ナデ

表3 出土石製品観察表

番号	地区	遺構	種別	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材
222	■■	SP352	块状耳飾	3.4	2.8残	0.4	6.6	翡翠?
223	■■	包含層	块状耳飾?	2.5残	1.6残	0.5	2.7	滑石
224	■■	包含層	石帶	2.6残	2.2残	0.7	8.9	黑色粘板岩
225	■■	包含層	扁平片岩石斧	4.8残	2.6	0.8	21.0	層灰岩系
226	■■	SP106	磨製石斧	9.8	4.2	2.2	142	安山岩系
227	■■	包含層	磨石	10.4	9.7	5.7	834	花崗岩
228	■■	包含層	石網	(14.2)	7.3残	-	-	滑石
229	■■	包含層	石網	(24.8)	3.2残	-	-	滑石

IV　まとめと考察

調査成果について

今回の発掘調査では、古代～中世を中心とする遺構・遺物を確認することができた。最後にこれらの成果についてまとめ、若干の考察を加えたい。

まず、遺構についてであるが、掘立柱建物跡を33棟復元することができた。このうち柱穴からの出土遺物などから年代を推定できるものがあり、SB 3・14・19は古代、SB 1・7・15・16・27は中世に比定できる。全てに当てはまる訳ではないが、棟方向が東西を向き、規模が比較的大きな建物が古代に、棟方向が南北を向き、規模が比較的小さな建物が中世の所産として捉えられそうであり、過去の調査成果とも整合性をもつ。このほかの遺構としては、土坑が確認されているが、そのほとんどが廃棄土坑であると考えられる。こうした中にあって、焼土塊がまとまって検出されたSK14は、炉としての機能を有していた可能性もある。

次に遺物についてであるが、今回の調査では、良好な土坑一括資料には恵まれなかったものの、そうした状況下にあっても、XII地区のSK33からは土師器壺（193～195）、壺（177～203）、甕（204～206）、三叉トチン（207～209）といった組成を確認することができた。10世紀後半で比定できる遺物群であろう。また、SK34では、図28：210・211に示したような土師器壺と、延喜通寶の共伴関係を確認することができた。延喜通寶の初鋤は907年であるので、少なくともこうした形態を呈する土器の年代は10世紀初頭を遡らないことが確認できる。延喜通寶と共に土器群については、平成8年度の調査でも確認されているが（IV地区 SK08）、銅錢自体の残存状況が悪いため、確実な事例とは言えなかった。相対的な土器編年で実年代を付与するにあたり、貴重な資料を得たと言えよう。

また、遺跡の中心時期からは外れるが、XI地区で出土した縄文時代の玦状耳飾、古墳時代の土師器甕は特筆すべき資料である。玦状耳飾は2点確認されており、そのうち1点（図29:222）は淡緑色の美しい色調であり、翡翠に近い石材が用いられている。玦状耳飾は県下では、下関市宮ノ原遺跡、同市長門国府跡、長門市雨乞台遺跡、宇部市月崎遺跡などで出土しているが、こうした諸事例と比較しても、今回得られた資料は石材的に優品である。

古墳時代の甕については、その出土状況からみて、単に廃棄されたというよりは、何らかの意図をもって埋置されていたと考えるほうが妥当であろう。資料自体も肩部にヘラ記号を施し、一般的な日常土器とは一線を画す存在であり、この地で何らかの祭祀的行為が執り行われていたことを想像することができる。ただし、東禅寺・黒山遺跡における過去の調査では、古墳時代の遺構・遺物は全く確認されていないため、今回の事例をいかなる脈絡で解釈すべきか判断が難しい。

暗渠排水溝について

今回の調査によって、X地区（図版3：下段）やXII地区（図版14：右下）に見られるような礫石を充填した溝と、XII地区（図版12：中段）のような側面から底面にかけて箇や粗朶を貼り付けた溝が検出された。いずれも埋土は單一層でほとんど遺物を含まず、地山に酷似する土質であった。

溝に礫石や松の木を充填する暗渠排水溝は、文政5（1822）年に大蔵永常が著した『農具便利論 中』にも記載されているが、扇の骨を開いたような形に溝を数本掘り、溝が集中する基部に排水口を設け

ているので、今回検出された排水溝の敷設形態とは異なる。

そこで水田排水の歴史を調べた結果、明治初期頃までは本渠に対して支渠を直角に設ける方法が考えられており、さらに富田式暗渠排水と呼ばれる排水法があることを確認した。考案者の富田甚平（1848～1927）は明治8（1875）年、熊本県で地租改正担当用掛に任命され、各村の土地等級の決定任務中に、畦畔が接しているにもかかわらず水田の等級に著しく差異があることに気付き、その原因は湿田の地下水に基づいていることを認識した。そこで、大蔵永常の暗渠配置法を試みたが不備であることを発見し、その後、独自の暗渠配置の原則を確立した。この業績によって富田は鹿児島県農業教師として招聘され、県下の農事改良、ことに暗渠排水の巡回指導をおこなった。さらに明治32（1899）年には山口県農業巡回教師・技師となり11年間山口県内の農事改良をすすめ、特に土壤の排水率を高め湛水田を乾田にすることを目的とした排水事業をおこない、その実績は着任後3年間で500町歩に及んでいる。また暗渠を排水溝から灌漑溝に変換できる富田考案の留井戸と呼ばれる構造を改良し、明治36年に水閘土管を考案した。ちなみにこの水閘土管を最初に試作したのは、佐波郡牟礼村（現防府市牟礼堀越）の宮本（土管）工場である。この土管については、地元の年配者からも昭和の中頃まで使用されていたと聞き及んでいる。

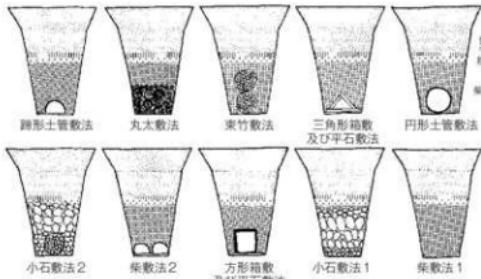


図30 富田式暗渠工事方法

を期待したい。なお、図30に示した富田式暗渠工事用例は、明治期における暗渠排水溝の指標として紹介した。

参考文献：富田甚平・建野保共著『富田式暗渠排水法』熊本県振農館 明治39（1906）年

江上利雄「簡易暗渠排水技術の確立－富田甚平の業績－」『日本農業発達史』第4巻

昭和29（1954）年

須々田黎吉「富田式暗渠排水法」解題 『明治農書全集』11巻 昭和60（1985）年

東禪寺・黒山遺跡出土金属製品の分析

財団法人元興寺文化財研究所 川本耕三

1. 分析対象

東禪寺・黒山遺跡出土古銭（No. 1、No. 2）2点（図1）

2. 分析内容

蛍光X線分析装置（XRF）を用いて、定性成分分析を行った。

3. 使用機器

（1）エネルギー分散型蛍光X線分析装置（XRF）【SII ナノテクノロジー SEA5230】

試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有の蛍光X線を検出することにより元素を同定する。

測定は大気中でφ1.8mmのコリメータを用い、45kVの管電圧で300秒間行った。この条件は大気中でカルシウム（Ca）より重い元素を検出できる。なお、X線ターゲットはモリブデン（Mo）である。

（2）マイクロスコープ【ハイロックス KH-1300】

4. 結果と考察

東禪寺・黒山遺跡出土古銭2点（No.1、No.2）は表面の細かい造形が失われるなど劣化が観察された（図1）。

No. 1は完形で、青白色の表面をXRFで分析したところ鉛（Pb）を強く検出した他に、鉄（Fe）、銅（Cu）、ヒ素（As）、銀（Ag）、スズ（Sn）を検出した（図3）。No. 2には欠損があり、茶色い表面をXRFで検出したところ、ほぼ同様の分析結果を得た（図4）。次に、No. 2の破断面をマイクロスコープで拡大観察した（図2）ところ、芯の部分には表面と比べて健全と思われる青緑色の部分があったため、この破断面をXRFで分析したところ銅と鉛を強く検出した（図5）。

試料を採取せず遺物をそのままXRFで測定する手法ではその表面しか分析できないので、土中で周辺環境の影響を受けて変化している古銭表面の分析結果は、本来とは異なるかも知れないことを考慮しなくてはいけない。

この2点の古銭の表面分析では鉛を強く検出したため鉛銭であると思われたが、No. 2については破断面の分析の結果、銅と鉛を強く検出したため銅や鉛等の合金製の可能性があった。また、鉄をやや強く検出した（図4）ことから、茶色い表面色は鉄成分由来の可能性が考えられた。（注：古銭No. 1は実測図213、古銭No. 2は実測図214に対応）

5. 分析データ



図1 東禪寺・黒山遺跡出土古銭（左：No. 1、右：No. 2）とその分析箇所

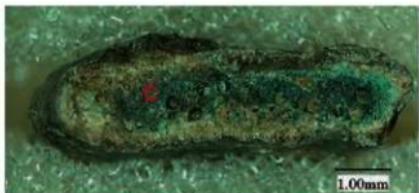


図2 No.2 古銭破断面図の拡大像とその分析箇所

[No. 1 古銭]

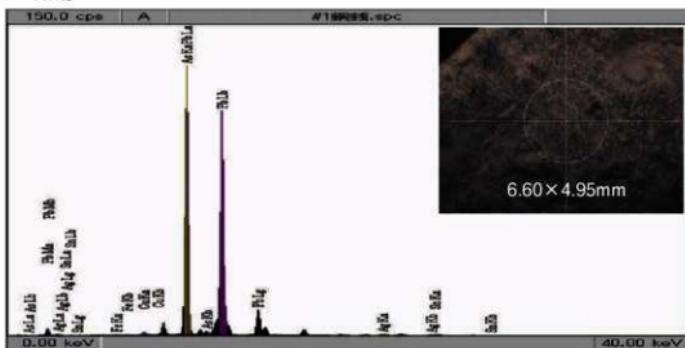


図3 No. 1 古銭分析箇所 A の XRF スペクトル

[No. 1 古銭]

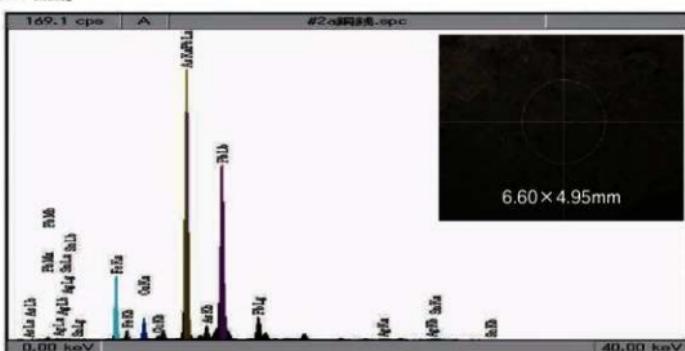


図4 No. 2 古銭分析箇所 B の XRF スペクトル

[No. 1 古銭]

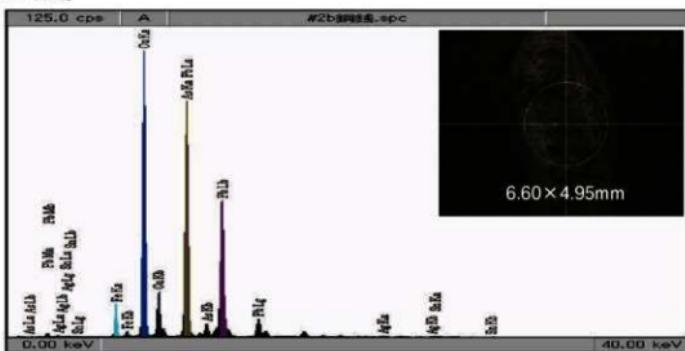


図5 No. 2 古銭分析箇所 C (破断面) の XRF スペクトル

図 版



調査区遠景

図版2



調査区全景



IX地区全景（南から）



X地区全景

図版4



XI地区全景



XD地区全景



XE地区全景

図版6



IX地区東壁土層断面（西から）



X地区南壁土層断面（北から）



SB1・SB2完掘状況



SP6上層遺物出土状況（西から）



SP6下層遺物出土状況（西から）



SP6完掘状況（西から）



SD1土層断面（西から）



X地区暗渠1土層断面（北から）



SD1完掘状況（東から）

図版8





SP30遺物出土状況（南西から）



SP258遺物出土状況（東から）



SP301遺物出土状況（南から）



SP361遺物出土状況（東から）



SP352遺物出土状況（西から）



SP352珠状耳飾出土状況（西から）



SP702遺物出土状況（北から）



SP756遺物出土状況（西から）

図版10



SK1遺物出土状況（南東から）



SK1完掘状況（南から）



SK14土層断面（東から）



SK14遺物出土状況（東から）



SK15土層断面（東から）



SK15完掘状況（西から）



SK16遺物出土状況（西から）



SK21遺物出土状況（西から）



SD2検出状況（北から）



SD2遺物出土状況（東から）



XI地区包含層遺物出土状況（南から）



SP429遺物出土状況（東から）



SP462遺物出土状況（南から）

図版12



SP475遺物出土状況（西から）



SP484遺物出土状況（南から）



SD7・SD8・SD9完掘状況（北東から）



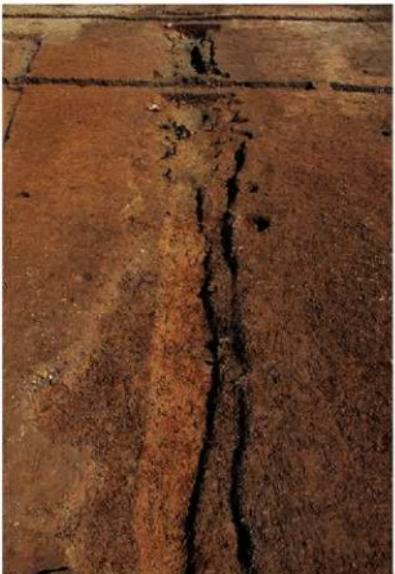
SD7底面



SD7排水口出土状況（北から）



SD8・SD9発掘状況（西から）



SD10・SD11検出状況（南から）



Ⅹ地区包含層石斧出土状況（東から）



SD10・SD11杭列出土状況（西から）



SP585遺物出土状況（東から）



SP606遺物出土状況（北から）

図版14



SP621遺物出土状況（北から）



SP665遺物出土状況（南から）



SP680遺物出土状況（西から）



SP698遺物出土状況（東から）



SK34遺物出土状況（南から）



X地区暗渠検出状況（西から）



SK34完掘状況（南から）



SK33遺物出土状況（北から）



SK33遺物出土状況（拡張後東から）

図版16



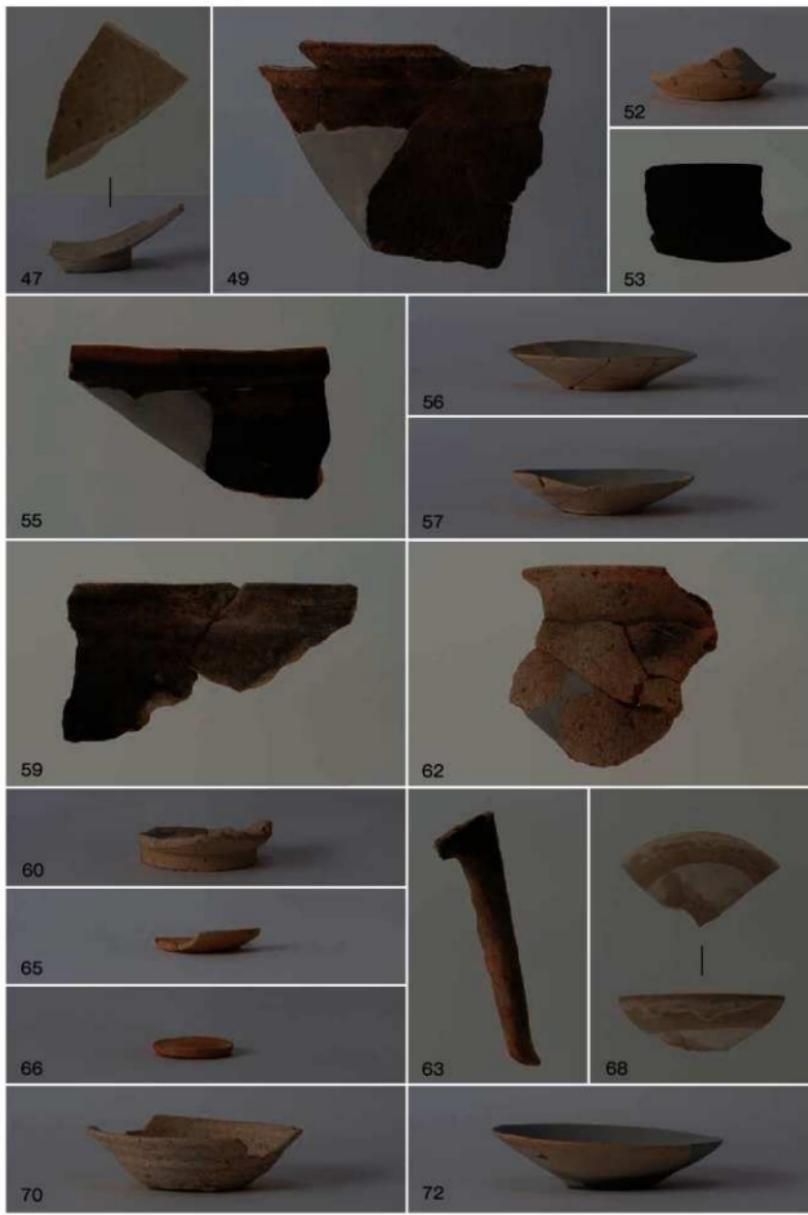
出土遺物①

図版17



出土遺物②

図版18



出土遺物③



出土遺物④

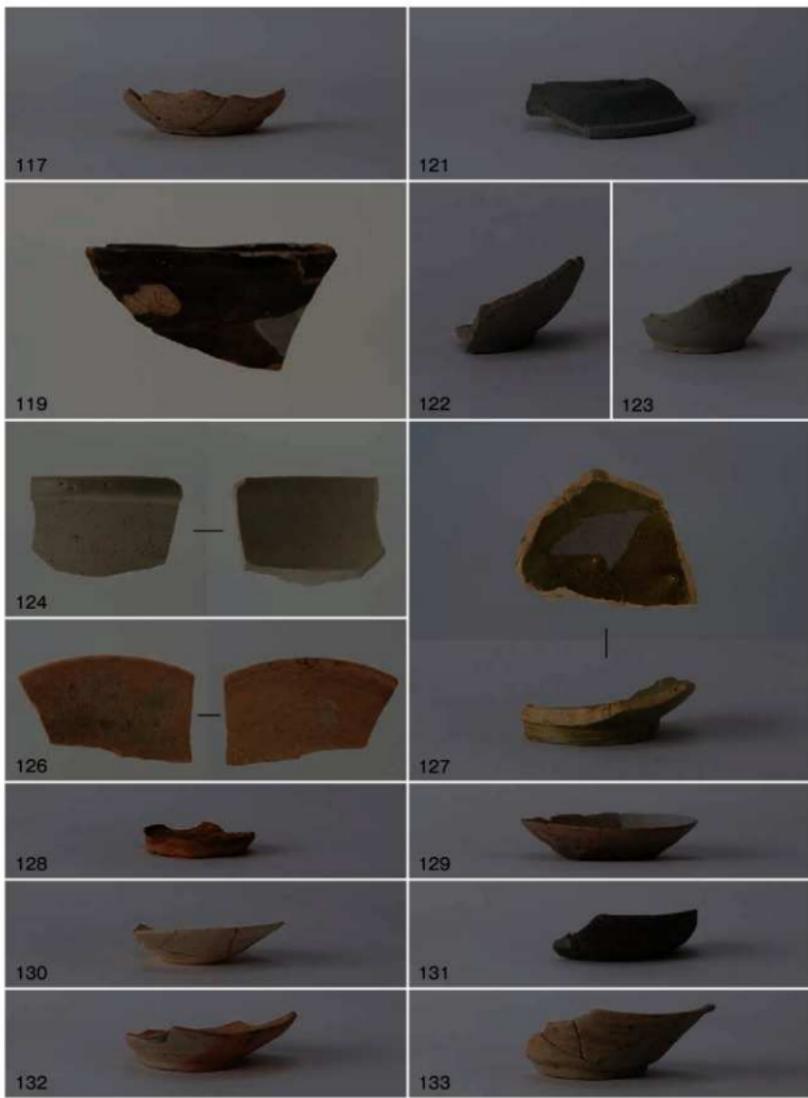
図版20



出土遺物⑤



図版22

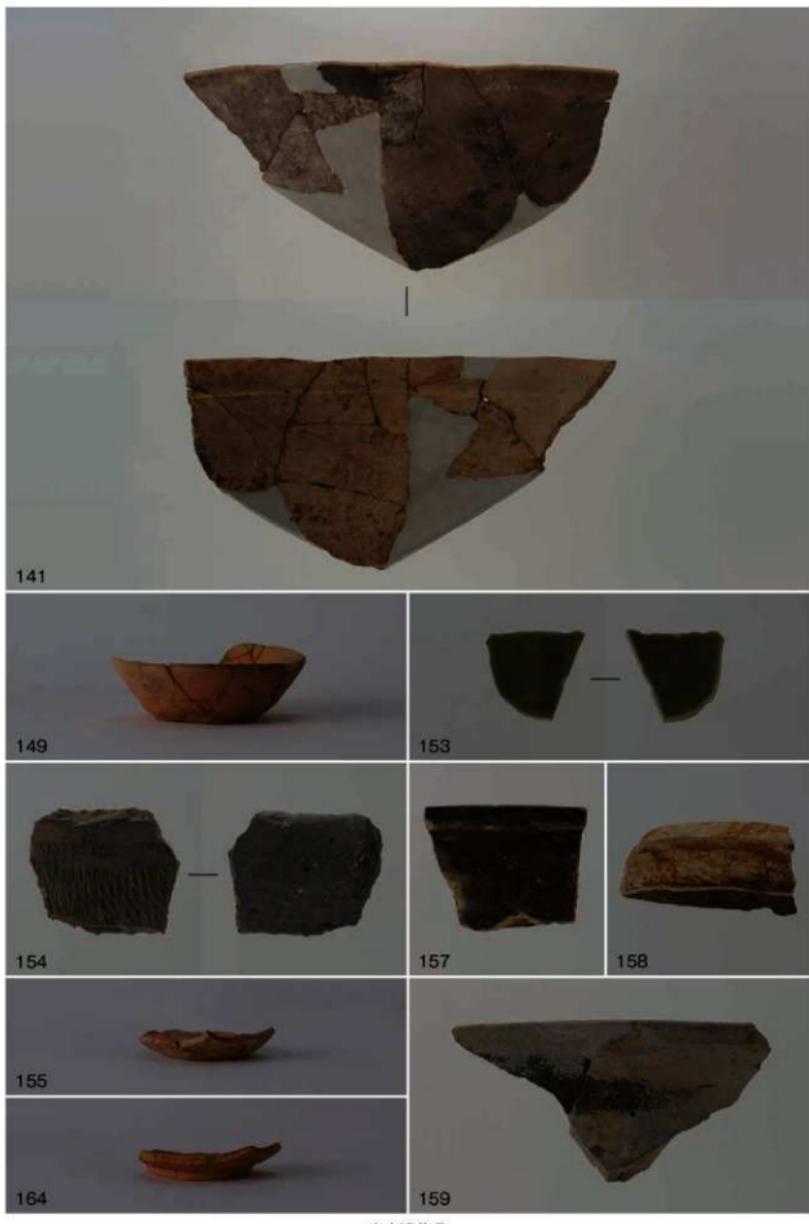


出土遺物⑦



出土遺物⑧

図版24



出土遺物⑨



出土遺物⑩

図版26



出土遺物⑪

図版27



出土遺物⑫

図版28



出土遺物⑬

報告書抄録

ふりがな	とうぜんじ・くろやまいせき 6
書名	東禅寺・黒山遺跡VI
副書名	
卷次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第77集
編集著者名	小南裕一 石川彰 米澤昭信 山田圭子
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号 TEL 083-923-1060
発行年月日	西暦2011年3月24日（平成23年3月24日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
とうぜんじ 東禅寺・ こうさんいせき 黒山遺跡VI	やまとものん 山口県 やまとこく 山口市 おおかみのむら 大字鋳銭司	35203		34° 5' 1"	131° 26' 49"	20100526 20101105	3,640m ²	遊水池建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東禅寺・ 黒山遺跡VI	集落跡	古代 中世	掘立柱建物 溝状遺構 土坑 柱穴約	33棟 18条 34基 1,800個	土師器 須恵器 土師質土器 瓦質土器 黒色土器 縹軸陶器 灰軸陶器 磁器 石器・石製品 金属製品

要約	東禅寺・黒山遺跡は、古代から中世の時期を主体とする集落遺跡であり、今回の発掘調査でも9世紀以降と考えられる掘立柱建物跡や、土坑等の遺構を確認することができた。こうした遺構の一部は9世紀前半に設置された周防鋳銭司と年代的にも接点をもつものと考えられ、古代における鋳銭活動の実態を追求していくうえでも貴重な資料と言える。 また、今回の調査では縄文時代の玦状耳飾や古墳時代の土師器甕など、古代を遡る時期の遺物を検出することができた。周防鋳銭司設置以前の当地域を考えるうえで、断片的ながらも重要な資料を得たと言えるであろう。

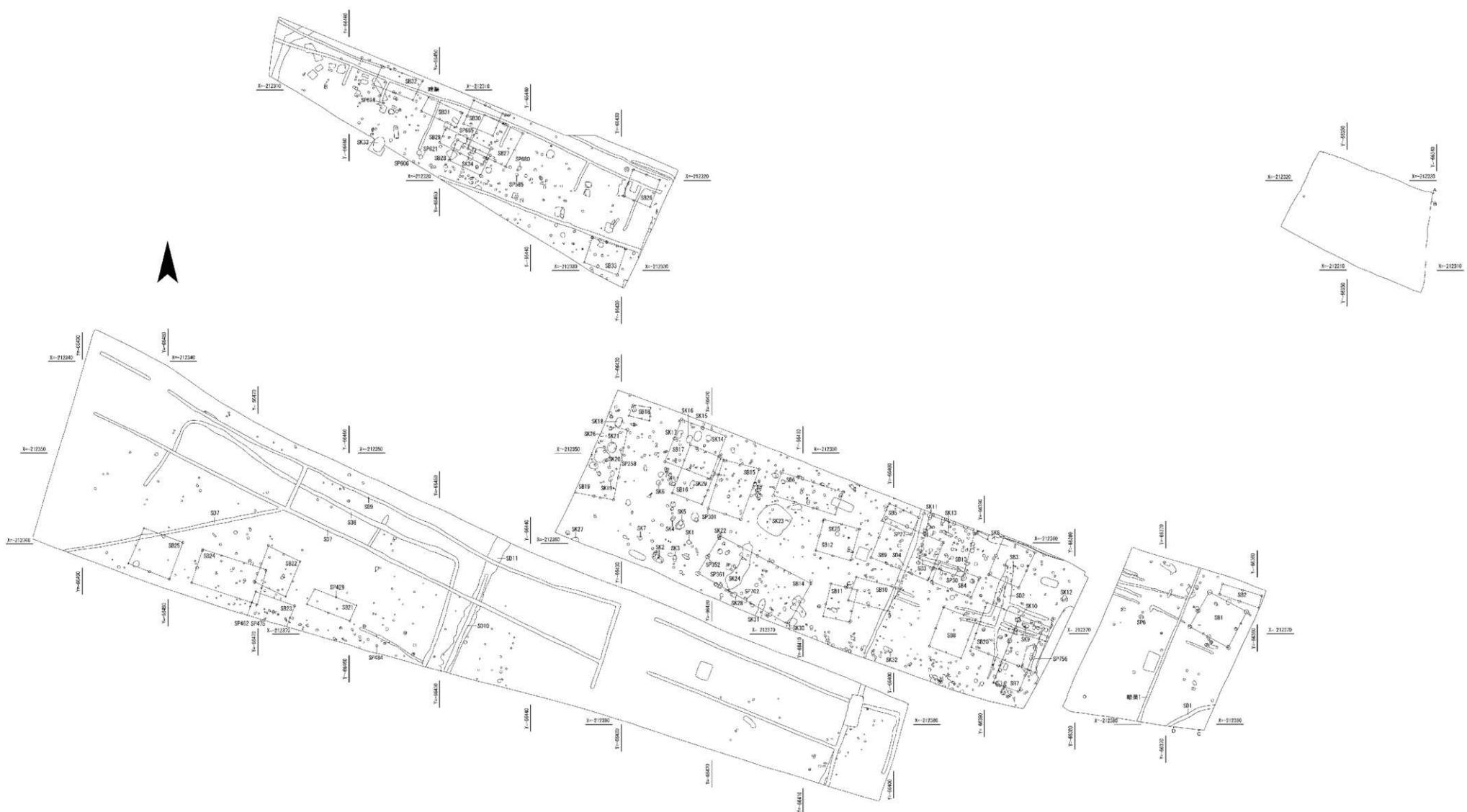
山口県埋蔵文化財センター調査報告 第77集

東禅寺・黒山遺跡VI

2011年3月24日

編集・発行 財団法人山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター
〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号

印 刷 大村印刷株式会社
〒747-0849 山口県防府市西仁井町1-21-55



東祥寺・黒山遺跡遺構配置図